

やはりおれのダンジョン探索はまちがっている。

しろゆき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。】と【ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか】の二次創作小説です。

バレンタインデー直前。

いつも通りの日常を過ごしていた比企谷八幡は、前触れもなく別世界で目覚める。

異世界で比企谷八幡は、白髪で赤い目をした少年、ベル・クラネルと出会う。

これは、二人の少年が歩み、女神が記す、間違った、【眷属の物語】

目次

| | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 第7話 | 第6話 | 第5話 | 第4話 | 第3話 | 第2話 | 第1話 |
| 69 | 59 | 46 | 36 | 28 | 16 | 1 |

第1話

バレンタインデー。

それは製菓会社の陰謀によって作り上げられたイベントであり、日本独自の学生だけではなく、社会人になつても行われている認知性の高いイベントである。

イベントの内容は誰もが知っている通り、女の子が好きな男の子にチョコ渡すという物なのだが、今では形骸化していて、友達に渡す友チョコや逆チョコ、ホモチョコ等も存在し、只の仲の良い人やお世話になっている人にチョコ渡して仲良く食べる日になりつつある。

だがそんなイベントでも青春真っ盛りな学生にとっては一大イベントであり、2月に入つて一週間も経過したこの時期の学生の会話は半分はこの話題なのではないだろうか。

やれ今年は貰えるかだの、やれ誰に渡すかだの、やれ俺は期待してねーしだのと毎年聞いたことある会話が教室内を飛びかっている。それしか毎年言うことがないのだろうか？

むしろ俺ぐらいにもなればこの時期であれば、その人間の顔を見ただけでそいつが次何を言いだすか当てる事まで可能だ、テンプレだからな。まあそんなことをできる相手もないんだけどな。

「やつべー。まじバレンタインとか超ヤバイでしょー!」

聞き覚えのある男の声が朝の教室に響く。別に怒鳴っている訳ではないのだが、やはりクラスを中心人物ともなると日常会話であつてもクラス中に届く声を出せないとダメなのだろう。なにそのスキル、超いらねえ。

ふと視線をそちらに向けるとやはりそちらには我がクラスを中心人物である葉山、戸部と大岡と大和が会話を繰り返していた。

「ちなみに隼人くんは去年何個チョコ貰ったの？二桁？もしかして三桁!?」

「いやー隼人くんはチョコとか受け取らないから！一杯貰えるのに全部断るとか隼人マジヤバイわー!」

「えー勿体無いわー。俺とか今年も義理チョコ少しだけとかになりそ

うで嫌だわー、チョコ食べてー!」

「それぐらいが普通なんだよ大岡、気にするなって」

普通ってなんだよ。俺にとつての普通は小町からのチョコ1個つてのが普通なんですが?え、みんな家族以外にも貰えてるの?俺普通じゃないの?リア充爆発しろ。

そんなことを考えている内にHRが始まる。

バレンタイン。今年も俺には全く関係ないな。

「おはようございますせんぱーい。聞きたいんですけど甘い物って好きですか?」

授業も終わり社畜精神をいつものように発揮して部室に入るや否や、何故か部室に最近入り浸り、紅茶を飲みながら寛いでいる総武高校の生徒会長である一色いろはに問い掛けられる。いやそもそも何でいるの?近頃来すぎだからね本当に。

「……何の用だ。生徒会がいいのか、生徒会は」

「卒業後はありますけど、生徒会は今はそんなに忙しくはないんですよ。むしろ受験で先生達がドタバタしてる分、わたしたちはヒマですかねー。ってそんなのはいいんですよ!先輩はチョコって好きですか?」

おい、さつきと質問変わったちゃってんじゃねーか。

何なの、この時期にチョコの質問とかやめろよ。期待しちゃうだろ、下駄箱と机の中を三度見ぐらいして笑われちゃうだろ。いや誰も俺のことなんて見てないか。

「甘い物は基本的になんでも好きだよ。人生は辛いからな、辛い分甘い物で中和したいんだよ」

「もしかしてつらいとからいをかけたのかしら?相変わらずわかりにくいことを言う男ねあなたは」

呆れたように息を吐いて雪ノ下雪乃は言う。

口語であればわからないと思ったのだが、雪ノ下からしたら詰まらない言葉遊びだったようだ。本当につらいとからいって振り仮名つかないと読めないよね。まあ前後の文章で大体わかるけど。

「……やっぱりチョコ作ろうかな」

何故か由比ヶ浜が決心をするように小声で呟く。

部室がそこ迄広くないので丸聞こえなのだが、もしかして由比ヶ浜さん今チョコを作るって言った？そんなことすれば言葉遊びではなく本当に辛くて辛いチョコが出来上ってしまい材料が勿体無いので是非やめて頂きたい。

「……由比ヶ浜。今の時代は中身よりも見た目だ。ラッピングに全力を注ぐことをお勧めする。チョコは市販の物にしとけ」

「なんかヒドくない☒」

「私も同意見よ由比ヶ浜さん」

「ゆきのんまで!?!?」

雪ノ下にまで辛辣に扱われたのがショックだったのが、由比ヶ浜が雪ノ下に抱きつく。雪ノ下も本気で嫌がる訳ではなく、もうされるがままである。はいはいゆるゆるゆるゆる。

「…ちなみに、結衣先輩って料理できない系なんですか?」

「…あれは料理とは言わん。食材を木炭に変える能力だ。いずれレベル2になって食材が毒薬に変わる。ちなみに雪ノ下がマンツーマンで教えてたのにも関わらずクッキーが木炭に仕上がったぞ」

一色が俺に近づいて小声で話しかけてきたので俺も小声で返す。

俺のネタになのか由比ヶ浜の料理スキルになのかはわからないが一色がドン引きしているのがわかる。だがむしろこれでもだいたい優しく言ってるつもりなんだけどな。

「そうだーだったらみんなでお菓子作りしようよ!あたしも少しは上手になったんだよ!」

由比ヶ浜が突拍子もないイベントを提案する。楽しそうに言っているとこ悪いけど、そのみんなですべての俺は入ってないよね?毒味役とか絶対無理だからね、お腹壊しちゃう。

「……それはみんなでお菓子作りではなく、私が由比ヶ浜さんにお菓子作りを教えるというのが正しいのではないかしら」

「甘いな。由比ヶ浜は教えた通りになんてお菓子は作れん。正しくは由比ヶ浜が材料をムダにするのをみんなで止めれたら止めようだ」

「お二人共酷くないですか…?」

一色が笑顔を引きつらせながら言うが、俺と雪ノ下からしたらお前は由比ヶ浜の料理というのを目の当たりにしてないからそんな風に言えるんだ。

もしこの由比ヶ浜のお菓子作り企画がまかり通るつたら一色が味見役してみればいい。俺たちが普段食べてるお菓子がどれだけ美味しい物なのかがわかるはずだ。

「ちなみに、わたしはお菓子作りが得意なので期待してて下さいね先輩」

一色が顔を近づけいつものようにあざとスマイルを浮かべ俺に言う。

期待って何だよ、もしかして俺にチョコくれるの? いやコイツのこどだからホワイトデーは100倍で返して下さいとか言って領収書渡してきたり、もしくは期待させるだけさせて当日に期待してたんですかキモいです先輩という感じで罵ってくる可能性もある。怖い! さすがいろはす超怖い!

「…期待ってなんだよ。むしろお前アレだろ、わたしお菓子作り好きなんですーって言って、形が歪なお菓子渡して男心擦ったりとかするタイプだろ。悪いが俺にあざとアピールはきかんからな」

「へえー、歪な形のお菓子で男心がくすぐられるんですか。まあそれは関係ないんですけど、先輩に渡すギリチョコは葉山先輩に渡すチョコの失敗作を入れるつもりなので、思う存分形が歪なチョコで悶えて下さいね!」

「はいはいあざといあざとい」

どうやら冗談ではなく本当に一色は俺にチョコをくれるようだ。やったよ戸部とその他とその他! これで俺も普通の仲間入りだよ! でもなんでだろう、あざとすぎて逆に後が怖いんですけど。

「……ヒッキー、いろはちゃんにデレデレしすぎだし」

見ると由比ヶ浜が拗ねたように頬を膨らませている。その仕草は子供や小動物を連想させて、正直少し可愛いと感じてしまう。どうしたの? いろはすのあざとさが移ったの?

「別にデレデレなんかしてないだろ。むしろうんざりしてるぞ俺は」
「あら、その割には鼻の下が伸びきってみつともない顔になっているわよ比企谷君。いえ…みつともない顔は元からだったかしら、相変わらず酷い顔ね」

俺を罵る時に楽しそうにいきいきした笑顔を浮かべるのやめてくれませんか雪ノ下さん。俺は眼は腐っているが顔のパーツ自体は良いはずだから酷い顔な筈がないんだ…そうだよね…？

「でもお菓子作り楽しそうですね！わたしも参加してもいいですかー？」

「あら、何を言っているの 一色さん。由比ヶ浜さんがみんなで言ったのだからあなたも入っているに決まっているじゃない。今更許可なんて必要ないわよ」

一色の発言に雪ノ下はさも当然でしょ？といった感じで答える。まあ一色の場合わざわざ許可なんかしなくても勝手に着いてきそうなイメージがあるけどな。

見ると何故か一色が何か意外だったのか口を少し開けて惚けている。

「どうした 一色」

「あ、いえ、ちよつと意外だったというか。……そっか、わたしもこの輪の中に入っついていいんだ…」

「ん？今なんて言った？後半聞こえなかったんだけど」

「なーんでもないですよせーんぱい！気にしないで下さい！それじゃあお菓子作りいつやりましょうか☒わたし的には明日とか予定空いてますよ！」

どこか照れたような、そしていつもの計算されたあざとい笑顔ではなく、もしかすると彼女の素を思わせる笑顔で 一色が言う。

「明日かー、あたしは大丈夫だよ！ゆきのんはどう？よかったらゆきのん家でやろうよ！」

「…そうね、特に予定がある訳でもないから問題ないわ」

どうやら由比ヶ浜発案のお菓子作り企画は、明日雪ノ下の家で決行することになったようだ。

雪ノ下さん最近由比ヶ浜さんに本当に甘くないですか。甘やかしてばかりいるとダメな子になっちゃいますよ。

「ま、精々楽しんで来いよ」

由比ヶ浜の料理スキルに不安を感じるが、雪ノ下と一緒にいるのなら大丈夫だろ、多分。大丈夫かなあ？

手に持った本に視線を戻そうとしたところで一色が不満気に声を上げる。

「いやいや、何他人事みたいなりアクションしてるんですか先輩。先輩も行くに決まってるじゃないですか」

「は？いや俺はお菓子作りに興味ないし、そもそも料理とかできないから居ても意味ないだろ」

俺は専業主夫になる為にいずれは家事スキルを手に入れなければならないが、だがそれは急務ではない。だから今の時点で俺に料理に対する関心はほぼないとやっていいだろう。一人暮らしても始めればいずれ覚えるさ。

だが俺の言葉に納得いかないのか、一色が顰めっ面で頬を膨らませる。本当に不機嫌な表情まであざといな。プロ意識でも持つてんの？

はあっと雪ノ下が大仰に溜息をついて呆れた表情をしたあと俺に話しかける。

「比企谷君、あなたまだ理解してないのかしら。由比ヶ浜さんがみんなと言ったのよ。不本意ではあるけれども、そのみんなにはあなたも含まれているの。そもそも料理が出来ないなんて言い訳が通用すると思ってるの？発案者が誰なのかをもう一度思い返してみなさい」

「ちよっと待ってゆきのん！最後の理由がおかしいよ！」

由比ヶ浜が悲痛な叫びを上げて雪ノ下に抱きつく、確かに由比ヶ浜が参加するのに作れないからは理由にはならないな。凄まじい説得力だ。

一頻り二人の世界を繰り広げると二人とも柔らかな笑顔でこちらを向き直して言う。

「ヒツキーも一緒やるんだからね」

「そうね、味見役は必要なものね。全員でやりましょう」

二人の優しい言葉に思わず顔を背ける。思わず二人の笑顔に動揺してしまっただが、これが彼女たちの優しさなのだ。

そして俺はその優しさに心地よさを感じている。そんな気持ちを悟らせまいと悪態をつくように俺は一言呟くように言う。

「…わかったよ」

今はまだ俺たちは本物ではないのかもしれない。本物なんてものを求めたとしても手に入る確証なんてどこにもない。

今の俺を見れば昔の俺はなんと言うだろうか。馴れ合いだ、欺瞞だ、誤魔化しだ、偽物だと罵るのかもしれない。

だけど本物なんて物は、そういった間違いを経験し、繰り返し、乗り越えて、それでも求め続けてようやく手に入る物なのではないのだろうか。

これすらももしかしたら言い訳なのかもしれない。けれど今はこの日常を踏みしめよう。毎日を噛みしめるように、考え続ける、そんな日常を送っていこう。

そう、いつも通りの日常だった。

そこまでは覚えている。

だけど、それ以降が、思い出せない。

目を覚ますとまるで知らない場所にいた。現状を理解しようとしたが、思いたせるのはそこまで。帰宅したのかどうかさえも定かではない。何処だここは？

「…知らない天井だ。」

というか岩だ。岩の天井だ。思わず憧れのネタを呟いたが当然誰からの返事もない。周りに誰もいないのだから当然なのだが、その誰もいない状況が焦りを助長させる。一度ため息を吐き、冷静に、至って冷静にと自分に言い聞かせる。

まずは状況把握だ。ぐるりと周りを見渡す。松明で灯されて見えるのは岩の壁、いくつにも枝分かれして岩の道。まるで広めの鍾乳洞のようだ。整備されているのか、とりあえず崩落する心配はなさそうだ。息も余り苦しくはないので酸素不足の心配もない。あとはここが獯猛な動物の巣だったりしない限りは一先ずは安全そうだ。

手荷物は何も持ってない。制服を着ているので下校中だと思うのだが鞆がない。鞆の中に携帯電話を入れてたのは失敗だったな。外部と連絡する手段が完全に断たれている

さて、状況判断が出来たところでこれからどう行動するかを考えよう。簡単に考えれば助けを待つか、出口を探すかの二択だな。てかその二択なら助けを待つ一択だ。間違いなく迷うだろうし、なにより動きたくない。ついでに働きたくないでござる！

そんなことを考えていると、遠くから足音が反響してきた。

やったね！働かなくて大正解！やっぱり俺の考えは合っていたというところがこれで証明されたぜ。専業主夫に俺はなる！

合流しようと足音のほうに向かって歩き始めたところでふと違和感に気づく。足音がまるで走っている音のようだ。そして足音以外に声が聞こえる。叫び声と雄叫びの二つの声。何かに追われている…？

嫌な予感がする。逃げるべきじゃないか？何処に逃げればいい？

思考がぐるぐる巡る。最善策かどうかは後回しだ。その場から離脱しようとしたが、一足遅かった。叫び声を上げる少年が視界に入ってきた。

今なら逃げればまだ間に合うんじゃないか？巻き込まれるのは真つ平御免だ。そう結論付け逃げ出そうとしたところで、もう一つの声の主が目に入る。目を疑う。

「…なんだよ、アレ…」

思わず声の上擦る。目の前の現実を現実と受け入れられない。受け入れること脳が拒否をする。なんだコレは。

夢だと片付けられたらどれだけ楽だろうか。だが、目の前の光景を目の当たりにしてガチガチと身体が震え始める程の恐怖という感情

が、これが現実だと突きつけてくる。はっ、何が理性の化物だ。所詮この程度で揺らぐ理性の何処が化物だというのか。

俺なんかより、目の前の牛の顔で人間の二倍以上の大きさの怪物のほうがよくつぽど化物だ。あれはRPGとかでよく見るミノタウロスだろうか？

「そこの人！早く逃げて!!」

「っ!?」

現実逃避した思考をミノタウロスに追われている少年の叫び声によつて現実へと戻される。そうだ、何をぼーつとしているんだ俺は。

思考を切り替えその場から駆け出す。現実を受け入れろ、でないと思死ぬぞ。自分にそう言い聞かせ全力で洞窟内を走る。こんなに全力で走ったのは何時振りだろうか？恐怖と緊張で額から吹き出す汗を拭い、後先も考えず只全力で走る。走る。

だが雄叫びは一向に遠くならない。むしろ自分の走った距離は疲労とは裏腹にどんどん近づいてきている気がする。え、本当に近いのか？もしかして後ろにいるの？

それはやはり気のせいではなく、先ほど俺に向かって叫んだ少年がいつの間にか追いついており、気づかない内に仲良く並走しているようになっていた。

「…ハア…お前なんでこつち来てんの？あんだだけ道があんだから普通の道に逃げねえ？なに巻き込んでくれてんの？嫌がらせ？」

息を切らしながら少年に向かって嫌味全開で言葉をぶつける。それを聞き涙目になりながら少年は謝罪の言葉を述べる。だが謝罪されたところでこの状況が好転する訳じゃない。むしろ今は考えられる状況で2番目の悪状況だ。早く対策を打たなければ取り返しのないことになりかねない。俺はこの状況を引き起こした張本人を睨みつけながら観察する。少年は思った以上に幼い顔立ちをしている、恐らく俺よりも年下、もしかすると小町ぐらいの年齢かもしれない。髪は白髪で目は赤眼、おいおい何処の一方通行さんだよ、ベクトル変換でカキケコしてくれよ。

そしてもう一つ彼には注視すべきものがあつた。それは彼が腰に

掛けた短剣、もしくはナイフだろうか？怖い物持ってんなコイツと思案すると同時にもう一つ思考が働く。なんでコイツはそんな物を持ってている？護身用にしては大袈裟過ぎる気もするし、もしかしてコイツは最初から戦う気だった？

そう考えると少年の身なりにも注目が向く。軽装ではあるがまるで戦う為の鎧のように見えなくもない。なんなんだコイツ？怪訝な視線を送っていると突如少年の顔が青ざめ愕然としていく。

「そ、そんな…!?？」

なんとなくだが少年が何に絶望しているのかが表情と視線だけでわかった。それは考えられる最悪の状況。最早好転どころか打開策等思いつかぬ程の絶体絶命。少年の足が徐々に止まっていく。今足を止めれば待っているのはミノタウロスに殺される結末だけだ、なのに何故止まるのか？そんなの、答えは決まりきっている。

「…行き止まりか。」

前方に目を向ければ最早道はなかった。眼前に広がるのは只の岩の壁。前方も左右も壁に囲まれ、後ろにはミノタウロス、絶望するには充分だ。

込み上げる感情は悔しきだろうか。思わず舌打ちをする。このような前に手を打つべきだった。やれることはまだあつたはずだ。手袋は残されていたはずだ。恐怖と焦燥でまともな思考を行えなかった俺の落ち度だ。俺の責任だ。

いや、俺が悔しさを感じているのは本当にそこなのだろうか？

この状況を作り出したのは誰だ？それは間違いなく目の前の少年であり、状況を悪化させていったのもこの少年だ。では何故今俺はこの状況に責任を感じて悔しさを感じたのか？違う、俺は責任を感じた訳じゃない。俺は普通に、只々普通に生きてきたのだ。だからこの最早生き残る手段が残されていない状況が許せなくて悔しかった。それこそ自分に責任を感じてしまう程に。

ではなんで俺は責任を感じてしまう程、死にたくないのか？

死にたくないなんて人なら当たり前だ。誰だって皆自分が可愛い。そんな当たり前のことに何故疑問を持つ？俺が生きたい理由はなんだけ？

“未練があるから”

ずっとその答えが浮かび上がる。ああ、俺は昔からそうだった。どうしても欲しい物があつた。それが欲しくて、それ以外がいらなくて。それ以外の物を憎んですらいた。

手に入らないことはわかっていた。そんな物が欲しいなんていうのは、傲慢で醜悪な願いだ。でも、この願いを受け入れて貰えた気がした。こんな願いを、願ってもいいのだと、望んでもいいのだと、こんな俺であつても求めていいのだと、許された気がした。

だからこそ、俺は諦めきれなくなってしまったのか。俺も随分弱く なつてしまったものだ。ふと自嘲気味の笑いが溢れる。でも、それでも俺は……

“俺は、本物が欲しい”

あの時、あの部屋で言った言葉と情景が頭の中でフラッシュバックする。走馬灯を見るのには早すぎる。しかも思い出した場面が黒歴史ときたもんだ。あ、俺楽しい思い出とか特になかったわ。

さて、俺がしなければならぬことはわかった。この現状の打破、ではどうすればいい？状況は絶望的だ、この状況を打開する為には糸口がある。何かないのか？突破口は、何かないのか!?!?

意識を集中させて周りをよく観察する。逸る感情を抑えつけ、至つて冷静に。

ミノタウロスを倒す必要はない。この袋小路から抜け出せればい

い。こちらに残っているカードは何がある？唾を飲み込み一度眼を閉じる。

策は二つ。これしかない。

俺は隣で怯えている少年を目を向ける。少年の格好を見る限り、ここに戦いに来た人間なのだろう。つまりこのミノタウロスと戦える可能性を持っているということだ。なら俺は奉仕部らしく、俺が助かる為に少年の手助けをしよう。

「おい。」

俺は隣の少年に声をかける。ビクつと肩を震わせて青ざめた顔をこちらに向ける。状況が状況だから仕方ないが、話掛けただけで泣きそうな顔をされるとトラウマが蘇って泣きそうになる。涙って場合によっては人を傷つけるんだよ？

「な、なんですか？」

「オドオドすんな。お前の腰に掛けてるの武器だろ？もしかしてアイツと戦えるんじゃないのか？」

「む！無理だよ！！？ミノタウロスは中層のモンスターなんだ！レベル1のボクじゃ手も足も出ないよ！！？」

気になる単語が幾つか出てきたが、それに触れている余裕はない。コイツの絶望も恐怖もコイツの中の常識も知ったことか。俺にとつてコイツはどうでもいい存在だ。だから思う存分利用させて貰う。

「そうか。なら大人しく一緒に死ぬか。夢も目標も仲間も投げ捨てて、諦めて、抗いもせずここで死ぬか？」

再び少年は肩を震わせ、下唇を噛み締める。そうか、コイツが奮い起つポイントがさっきのセリフの中にあつたのか。なら好都合だ。

「…俺は死にたくない。死ぬ訳にはいかない。お前はどうかんだ？」

「……死にたくない。」

俯き、呟くように吐き出したその言葉を俺は聞き逃さない。

「死にたくない？お前さっき言ってたじゃないか、無理だって。勝てないんだろ？なら何もせずに諦めるほうが楽じゃねえか。大人しく全部捨てようぜ？」

さあ、餌は蒔いた。死にたくないんだろ？喰らい付いてこい。

「…嫌だ。」

聞こえるか聞こえないかギリギリの音量だが、確かに彼は言った。俺の甘言を否定した。はつきりと否定した。ならやることは一つだろ？その、決意を秘めた顔をとつとと上げろよ。

「ここで死んだら…夢も叶えられない。恩も返せない。そんなの…絶対に嫌だっ!!?」

少年は顔を上げ、短剣を敵に向け奮い起つ。いい顔になった、これなら期待できるか？

なんて考えはMAXコーヒーより甘かった。

結論から言えば少年はミノタウロスに勇敢に立ち向かった、称賛されるべき勇氣ある行動だ。だが現実には小説や漫画のように温くはなく、先ほど少年が自分で言った通り手も足も出なかった。ほとんど一瞬で少年の決意と勇氣は薙ぎ払われた。素人目にもわかるぐらい実力が違いすぎる。クソつ、俺のせつかくの挑発も無意味だったってことかよ。

目の前の現実を目を背けたい衝動を抑えこみ、一度深呼吸をする。策の一つは完膚無きまでに潰された。今焚き付けた少年がミノタウロスを倒してくれれば万々歳だったのだが、奇跡というのはやはり現実では起きないということだろう。

「…もうこれしかないか…」

諦めを込めて溜息交じりに言葉を吐く。気は進まないが俺は思っているのを彼女達が知れば、また呆れられるだろうか？だが、やはり俺にはこういうやり方しか出来ないのだ。

やる事は来まった。あとは行動するだけだ。ミノタウロスに薙ぎ払われた少年に近づき、少年の側に落ちている短剣を拾い持つ。初めてこんなものを持つが結構重いな。

「が…な、なにを…!?」

血を吐き出し、地面に倒れこんだ少年は、微かに声を絞り出して俺

に言う。そんな顔すんな、俺は自分の為にやるだけだ。

「悪いな無茶振りしちまってよ。俺も死なない為に、やれるだけやってみることにするわ。」

少年を一瞥しミノタウロスと向き合う。勝てるとは思っちゃいない。むしろここで死ぬかもしれないと諦めすら入っているぐらいだ。だが、それでも、やらなきゃいけない気がした。

手が震える。吐き気が込み上げる。汗が額から溢れる。口が渇く。心臓の鼓動がこれ以上はないほど早く刻まれているのが分かる。どうやら俺は思った以上に人の子だったらしい。

さて、そろそろ行くか。

覚悟を決め叫び声を上げながら俺はミノタウロスに突っ込む。勝算なんかない、破れかぶれの特攻もいいとこだ。だが策はある。要は逃げればいいんだ、勝つ必要はない。成功する確率なんて奇跡にも近いだろう。でも0じゃない。0じゃないならやるしかないだろう。やばい、俺超カッコいい。

ミノタウロスが右腕を振り上げる。さあ来い、目に物を見せてやる。

ミノタウロスの動きに合わせて俺も思い描いている作戦通り動くとした。だがその作戦は失敗に終わった。俺の作戦が駄目だった訳ではない、それ以前の問題だ。俺が動くよりも、ミノタウロスが攻撃するよりも早く、剣線がミノタウロスを引き裂いた。

まさに一瞬の出来事だった。目にも留まらぬ攻撃により血飛沫を上げながら崩れ落ちるミノタウロス。ミノタウロスの血を浴びて血塗れになる俺と少年とは対象的にミノタウロスを切り裂いた少女は返り血一つ浴びずに美しい金色に輝く髪を揺らし、凜として咲き誇っている。

何処かその佇まいは、
彼女を思い出させた。

「あの…大丈夫ですか？」

それが俺たちと
“ 剣姫 ” アイズ・ヴァレンシュタインとの出会いだった。

第2話

“ 迷宮都市 ” オラリオ ” 広大な地下迷宮、通称 “ ダンジョン ” を保有する巨大都市。ダンジョンを管理するギルドを中核として栄えている街らしい。ダンジョンでは先程のミノタウロスのような数多のモンスターが闊歩し、命さえ落としかねない危険な場所である。

そのダンジョンを探索し、モンスターを倒したり、鉱石等を採掘したりして、得た収入で生計を立てる職業 「冒険者」 と呼ぶ。

白髪の少年、ベル・クラネルの説明を要約するとこんな感じか。今の状況を理解する為にベル・クラネルからこの街のことを説明して貰ったが、どうやら話しを聞いている限り、俺の知っている常識とは大分異なっていることから、この場所が自分の住んでいた世界とは違う世界、異世界の可能性が高いと思われる。どんなラノベ主人公だよ俺。異世界からぼっちが来てしまいました。

ただ異世界から来ました！なんて言ってしまったら完全に頭のおかしい人、もしくは可哀想な人して扱われかねないので極力そのことは隠して話を聞くことにする。雪ノ下辺りなら矛盾点や違和感を突いてきて全部バレてしまいそうだが、どうやらベル・クラネルは由比ヶ浜並みとはいかないまでも単純のようで、今のところはバレてはいないように思う。雪ノ下さん辺りならバレてないと思わせて全て以上のことを察しそうではあるが、むしろ黒幕の可能性まである。

説明を聞きながらベル・クラネルと共に街を歩く。血塗れの男二人が並んで歩いている為、どうしても奇異な視線を向けられる。嘲笑、侮蔑、どうやら異世界と言っても人間の本质は変わらないらしい。俺は別に気にも留めないが、ベル・クラネルはどうなのだろうかと少し気にかけたが、要らぬ気遣いだったようだ。口を開くと先程助けられた金髪女剣士の話ばかりで、周りのことなど目に入っていないようだ。

俺はベル・クラネルの今の状況を知っている。少し優しくされた、もしくは話しかけられた程度で相手を知っている気になり、これが恋だと思ひ込む偽物の恋心。きっとあの金髪女剣士は相手がベル・クラ

ネルじやなくても助けたし、助ける人間がいなくてもミノタウロスを討伐しただろう。そんな事実には目もくれず、ただ自分を助けたという事実だけを美化する、美しい思い出にする、運命の出会いだと思いつむ。そしてその美化された思い出と現実には不和が発生したとき、人は勝手に絶望し、幻滅するのだ。

少し釘を刺しておくべきかとも思ったが、今は一緒に行動しているが、俺とベル・クラネルの関係は他人だ、無関係だ。一時間後には別行動しているかもしれないし、明日にはお互いのこと等忘れているかもしれない。ならこんな忠告は無意味だ、俺の言葉はベル・クラネルにとって無価値だ。苦い経験が思春期男子の心を成長させるのだ、と勝手に自分の思い出と重ね合わせて納得する。

「…なあ、俺たちは何処に向かっているんだ？」

「えつとね、ボクと神様の家だよ。」

神様？何言ってるんだコイツ。やべえもしかして信仰宗教的なやつか？貴方は神を信じますかとか言われるの？神龍なら信じたいです！

相当訝しげな表情をしていたのか、ベル・クラネルは困ったように頬を指でかき、説明を始めた。なんでもこの世界には暇を持て余した神々の遊びよろしく、神々が下界に降りてきて人々に信託を与えているらしい。

凄まじいゲーム脳設定だ。おまけにこの世界には魔法やスキルまで存在するらしい。SAOなの？いやむしろALOか。成り行きでコイツの神様と会うことになってしまったが好都合だ。神様というくらいだ、俺がここに居る理由や解決策がわかるかもしれない。

なんてことを考えながら街道を歩き、街外れまで歩いたところで目的地に辿り着いたようだ。それは見るからにオンボロで、傍目では廃墟にしか見えない教会跡地。手入れも行き届いていないように感じられる。

おいおい、本当にここに神様住んでんの？疫病神か死神じやないだろうな。眉間に皺が寄り、腐っていると評判の自分の目が更に腐っているのが分かる。これは余り期待出来ないな。

「あはは…じやあ案内するよ」

俺の訝しげな表情を見て、何を考えているのか気づいたのかベル・クラネルが

困ったような笑顔を浮かべながら教会へて誘う。扉を開けたらあから不思議、神秘的な空間が広がって…いる訳もなく、外装から予想された通りの半壊状態。屋根も穴が開き陽射しが入り込んでしまっている。正直に感想を言えば、最早人の住める建物ではない。お世話でもない家だね！俺もこんな家に住みたいな！なんて誰も言わないだろう。まあ俺はお世話を言う相手もないけどな。誰にも気を使わなくていいなんて、やつぱりぼっちって素晴らしい！

内装を観察しているとベル・クラネルは一番奥の棚の裏まで身を進める。着いて行くとそこには地下へと伸びる階段があり、ベル・クラネルに続いて階段を下り、下った先にあるドアから地下部屋へと入る。

「神様、帰ってきましたー！ただいまー！」

声を張り上げて地下部屋に入って行く。地下部屋というと拷問部屋や牢屋等を思い浮かべてしまったが、実際はイメージとは全く違う生活感にあふれた人の暮らす小部屋といった感じだった。まあボロいには変わりはないが…

「おかえりーベルくんー！って血塗れじゃないかい！どうしたんだい!?？」

ベル・クラネルの呼び掛けに応じた少女が、ベル・クラネルの血塗れの姿を見た途端慌てて駆け寄ってくる。見た目はどちらかと言うと少女ではなく幼女だが、一部分だけが完全に幼女から掛け離れている。由比ヶ浜ばりの大きさだ、雪ノ下が落ち込みかねないな。

少し声を荒げながらペタペタとベル・クラネルを少女は触る、怪我がないかを確認しているようだ。怪我の確認方法としては不適切過ぎやしないだろうか？ただイチャイチャしているようにしか見えない。コイツ、神様とだけでなく幼女と一緒に暮らしてんの？なんて羨ましい、爆発しろ。

一通り怪我がないかを確認し終えてから、幼女はようやく俺に気づ

いたようだ。ふう、招待されたのに居ない者として扱われたのかと思つて不安になつてしまつたじゃないか。

「ベル君、この子は誰だい？」

「あ、神様、紹介します。ダンジョンで出会つた…えつと、ひ…」

「比企谷八幡です」

幼女に自己紹介をする。え、この子が神様なの？神様つて髭を生やしたおじいちゃんとか全身緑色の触覚が生えた宇宙人とかじゃないの？神様のイメージ像の崩壊を呼び起こした張本人である幼女神様は人の顔をじろじろと覗きこんで思案顔になる。

この行為には身に覚えがある、強化外骨格を持ったシスコンお姉ちゃんも初めて出会つた時にもこの行為をされている。つまりは品定めである。品定めの時ですらあの張り付いた笑顔を崩さなかつたあの人と比べたら随分と大胆に品定めをする神様だ、隠すのが下手なのか隠す気がないのか。あるいはどちらもしかかもしれない。

「えつと…比企谷君だっけ？ベル君が友達を連れてくるなんて初めてだから驚いちやつたよ！キミも血塗れだけど、2人とも何かあつたのかい？」

「たまたま会つただけで、別に友達じゃないですけど。説明し辛いな…ベル・クラネル、代わりに説明してくれ」

あまり現状を把握しきれていないのと説明するのが面倒なので説明を全てベル・クラネルに任せることにする。丸投げされたのに関わらず嫌な顔一つせずベル・クラネルは神様に説明をする。コイツ、少しお人好し過ぎないか？直ぐに騙されたり、変な女に付きまとわれたり、嵌められたりしちやいそうでお兄さん心配。

「そうか、色々と大変だったね。ベル君を助けてくれたみたいでありがとう、感謝するよ！ボクはヘスティア、よろしくね比企谷君！」

一通りベル・クラネルがヘスティアと名乗つた少女に事情を説明し終わると彼女はそう言った。

助けた覚えなど微塵もないが、ここでそれを否定しても意味はなさそうなので黙っておくことにする。彼女は屈託のない笑みを浮かべているようで、眼は警戒を緩めていない。ベル・クラネル程単純でも

ないらしい。

「それよりベル君。君は一度シャワーを浴びたほうがいいんじゃないかい？いつ迄血塗れでいるつもりだい？」

「あ、はい。そうですね。比企谷君もシャワー浴びます？」

「そりやそうだよ。ただウチは一緒に浴びれる程シャワールームが広くないから、順番に浴びるといい。客人の前で血塗れというのも締まらないし、ベル君が先に浴びてくるといいよ」

ヘスティアに言われるがままベル・クラネルは少し遠慮がちにシャワールームへと向かう。そりや客人を放っておいて家主が先にシャワーを浴びるっておかしいよな。

ベル・クラネルがシャワールームに入ったところでヘスティアがこちらに目線を向けながら椅子に座る。つい先ほどまでベル・クラネルと会話をしていた柔らかい雰囲気の幼女とはまるで別人のようだ。

「さてと、じゃあ本題に入ろうか」

一言で空気が張り詰めた物に切り替わる。二人きりという言葉が聞くともどうしても甘ったるい状況を思い浮かべてしまいが、彼女の眼が語るのは疑惑と警戒、そして敵意である。甘美な状況など微塵も感じられはしない。この状況を例えるならば、警察の取り調べである。もしくは平塚先生の呼び出し。

「不躰だとは思うけど聞かせて貰うよ。君は一体何者だい？人間、なんだらうけど、少し違う。まるでボクたちとは違う理の存在のように感じる。はつきり聞こうかい？君はベル君の敵かい？味方かい？」

彼女の人の心の奥を覗き込むような視線に、何処か雪ノ下陽乃を思い出す。もしかすると人を見抜く力なら彼女より上かもしれない。どうやらこの神様の本質は俺の苦手なタイプなのかも知れない。

「…別に敵でも味方でもないですよ。敵になる程アイツのことを俺は知らないですし、味方をする程アイツと関係がない。今ここにいるのだから成り行きです」

「…どうやな本心から言ってるようだね。そこ迄他人に関心のない人間は珍しいよ」

「そうですね？人間なんて、みんな他人に関心なんてないでしょう。」

興味が湧くのなんて極一部ですよ。別に俺が例外な訳じゃない、まあ人よりも他人に期待してない自信はありますけどね。」

「そこまで言い切れてしまう時点で大分捻くれてると思うけどね、ボクは。おっと、話が逸れてきてるじゃないか。とりあえずベル君の敵ではなさそうだね、じゃあもう一つの質問に答えて貰おうかな？君は一体何者なんだい？」

敵ではないと理解するや否や警戒を薄める。神様としては少し不用心な気もするが話が早く進むのに越したことはない。今の自分の現状、別世界から来た可能性があること等を嘘を交えても意味もなさそうなので詳らかに説明する。

荒唐無稽で電波気味の話にも関わらず、最後まで話を遮らずに説明を聞き入れた姿勢に、この女の子が神様だという信憑性に欠ける話を、少し信じてもいいかと考え始める。俺の話を最後まで聞いてくれる人間は少ないからな、むしろいないまでもある。

「…正直に言おう。ボクにもさっぱりわからないよ」

おい、俺の多少の信用を返してくれ。

肩透かしな返答に思わずうんざりしてしまう。

「期待していた訳じゃないが、この世界には魔法もあって神様までいるんだろ？異世界からの勇者が訪ねるなんてよくある話じゃねえの？」

「バカ言うなよ。異世界から来た人間なんて聞いたこともないよ。イレギュラーもイレギュラーだよ。あとそれと、君は断じて勇者なんてカッコいいものじゃない、遭難者もいいとこや」

「ナチュラルに罵倒すんのやめてくんない？傷ついちゃうだろ俺が」

「少ししか会話をしていないが、君がこの程度じゃ全く傷つかないことは理解しているさ。たださっきはさっぱりわからないなんて言っただけど、可能性の一つは提示できるよ」

ヘスティアが人差し指をピンと立てて笑顔を咲かせる。なにこの子、あざとい。この幼女神様属性多すぎやしないか？一人で最近のハーレムラノベヒロインの全属性を網羅してしまうのではないだろうか。

だが少しでも今の何もわからない現状を脱却できるのなら、どんな頼りない神様の意見だろうと一考してみる価値はあるだろう。

「可能性ってなんだ？」

「ダンジョンさ」

ノータイムで答えが返ってくる。正直その答えは予想してなかった訳じゃない、むしろ俺も可能性の一つとして考えてはいた。だが俺にとって今この世界は凡ゆることが俺をこの世界へと誘った原因として考えられてしまえる為、むしろ何故他の魔法や神といった選択肢を排除し、ダンジョンの可能性として即答することが出来る理由かわからない。

「ダンジョン？ただの迷宮じゃないのか？むしろ神様の仕業ってほうが俺としては納得が出来るんだが」

「ちつつちちー。甘いよ比企谷君！ボクたち神つてのは娯楽に飢えてるからね、異世界から人間を召喚するなんてそんな面白そうなことを神々が話題にしない訳がないのさ。だけどダンジョンは違う、神々のボクたちでさえ未知なことが多いのさ。それに君は目覚めたらダンジョンに居たんだろう？なら原因の最優力候補はダンジョンだとボクは思うけどね」

神様の意見とは到底思えない、例えるならお前顔が怖いから犯人！ぐらゐの暴論を得意気にひけらかし胸を張る。最早目の前の少女からは威厳を感じない、もしかするとこの幼女は神様の中でもハズレな神様なのではないだろうか。

「…まあ百歩譲ってダンジョンに元の世界に戻れる可能性や、この世界に招かれた原因があると仮定しましょう。では神様、俺の代わりに真偽を確かめてきて下さい」

「いきなり全部人任せかい!?…残念だけど下界に降りてきた神は『神の力』を使えない。そして神である者のダンジョンの探索は禁止されている。申し訳ないけど君の頼みは受けられないよ」

「じゃああのベル・クラネルでもいいです。俺は幾らでも待ちます」

「君自信のことなのに、なんで君が動かないのさ…」

呆れて手を額に当てて溜息を吐く。呆れられようが状況が悪かる

うが俺の働きたくないという本質は変わらない。更に言えばあんなミノタウロスみたいなモンスターがいるダンジョンに向かうなんて絶対にお断りだ、直ぐに返事をしない屍になる自信がある。スライムにも勝てないかもしれない、てかスライムはいるのかな？スライムがいるなら見てみたい気が…はっ！危ない危ない、スライムに釣られてダンジョンに少しばかりの興味が沸いてしまっていた。これがドラクエの魔力か、なんて恐ろしい！

「ダンジョン探索なんて本職がやるべきでしょう。素人が手を出しても碌な事にならないのは目に見えてる。直ぐにモンスターに殺られた俺の遺体を片付ける冒険者の苦労も考えるべきだ」

「考えるべき箇所がおかしすぎるよ…まあいいさ、じゃあ仮に君の言う通り君がこの世界に来た原因の追究や帰る方法を他の冒険者に依頼するでしょう。違うファミリアに頼んでみるのもありかもしれないね」

普段俺の働きたくない理論は否定しかされてこなかったので、このような反応は物珍しく感じてしまう。やはり腐つても神ということだろう、なんて寛大な精神なのだろうか。このまま俺を養ってくれると八幡的に超ポイント高い！

そんな俺の淡い期待など露知らず、ヘスティアはまるで悪戯を思いついた子供のような笑みを浮かべて、でもねと言葉を続ける。もう嫌な予感しかしない。

「…君さ、お金は持っているのかい？」

お金？マニー？考えてみると今俺は総武高校の制服を着てはいるが、鞆を持っていなかった。スマホも財布も鞆の中に入れていた、つまり俺は今無一文ということになる。まあ財布をもし持っていたとしても通貨が違うだろうから余り意味はないだろうが。

だが今ヘスティアが言った金銭の問題は、この世界から出れるまでは必ず付いて回る大問題だ。働きたくなく毛頭無いが、元の世界に戻るまでの間だけでも生きて行く為に働かなければならない可能性が出てくる。働きたくない、働きたくないでござる！

「ちなみにうちは居候を置いてあげられる余裕は全くないよ。働かざる

もの食うべからずってやつさ！」

「それって単に貧乏ってだけじゃないですか？…あー働きたくねー。てことは寝床も確保しないとってことか、身分も明かせない不審人物を雇ってくれるとこなんてあるもんですか？」

楽観視していた訳ではないが、この世界で生きて行く為にはやらなければならぬことが多すぎる。そして情報の無さや異世界人である事実が枷になる。これは想像以上に大変そうだ

「雇ってくれるとこかい？難しいかもしれないね、仕事を選びさえしなければ生きてはいけるかもしれないけど、元の世界に戻る方法にまで手を着ける余裕はないだろうね」

ヘスティアの言った通り、元の世界に戻る方法が最大の問題であり、もつとも優先順位が高い問題でもある。いつまでもこの世界に留まるつもりはない。仕事と寝床の確保にいつまでも時間を費やしている場合ではないのだ。だがその二つの問題と金銭の問題をクリアしないと元の世界に戻る方法に着手できない。どう見積っても数年はかかる累積した問題に頭を抱えそうになる。

「…比企谷くん。一つだけ君の問題を解消する方法があるんだけど、聞く気はあるかい？」

ヘスティアの言葉に思わず目を見開く。えっ？そんな都合のいい方法があるの！？神様ならではのコネや裏技があるのだろうか？流石神様！もうバカにしません！

俺の期待の眼差しに笑顔で応え、ヘスティアは口を開く。

「比企谷くん。君がボクのファミリアに入って、冒険者になるんだ！」

……

は？なに言ってるのこの神様（笑）

バカにしませんとの誓いをあつさりと捨て、彼女の言葉の意味を考える。冒険者とはつまりベル・クラネルや俺たちを助けた金髪女剣士のように、ダンジョンに潜りモンスターと戦って生活をするゲームキャラみたいな奴らのことを指しているのだろう。

そんな冒険者に俺が？ないない。

「さつきも言った通り、俺が冒険者になったところで死に行くようなもんですよ。俺のコマンドはいのちをだいじに一択なんでその案は却下です」

「恩恵を与えればそうやすやすとは死なないさ。それにボクのファミリアに入ればこの家に住むのを許可してあげてもいい。そしてベル君が君と一緒にダンジョン探索するというサポート付きだ！まあベル君も駆け出しだけどね…」

：確かに直ぐにダンジョンに手を着けられて寝床も確保できる。悪い話ではない。が、いい話でもない。

まず第一に俺には戦闘経験がない。幾ら恩恵で戦えるようになると言っても、今まで平和な世界でのほほんと学生をしてきた自分にとって、突然命懸けの戦闘は厳しいものがある。

第二にヘスティアはベル・クラネルのことを駆け出しと言った。彼女は先程ベル・クラネルのサポート付きと言ったが、彼もほぼ初心者なのであればサポートには然程期待できない。つまりダンジョン探索は難航する可能性が高い。

つまりこの提案を受けるということは俺が一からダンジョンを攻略するという事だ。素人があつさり攻略出来るのであれば冒険者なんて職業は衰退しているはず、そんな簡単なものではないだろう。つまりこの方法も元の世界に戻るのに数年、いや数十年とかかる見込みの提案だ。

断りたい衝動に駆られるが、俺の返事を待たずにヘスティアは話し始める。

「…君には全く関係ない話だけど、ボクは不安なんだ。今日もだけれベル君は冒険者に夢を見て無茶をし過ぎる。だけどボクはベル君と一緒にダンジョンには行けない。もどかしいよ」

寂しさと辛さを噛み締めてヘスティアは笑みを浮かべる。思えば出会ってから彼女はずっとベル・クラネルの心配ばかりしている。余裕大切に思っているのだろう。痛々しさも感じる笑みを消して、ヘスティアは真つ直ぐとこちらを見て言う。それは何よりも真剣で、そして、本物を感じる言葉だった。

「お願いだ。ベル君の助けになつてくれないか？」

そのまま彼女は頭を下げる。ただ頭を下げる訳ではない、土下座だ。この世界にも土下座という文化があったとは。

ヘステイアは真摯に誠意を見せた。本音を晒した。俺の事情よりもベル・クラネルを助けて欲しいと。身勝手な思いを吐き出した。なら俺はどうする？

彼女の誠意を蔑ろにし、踏み躪り、提案を蹴るのか？

俺には関係のない話だ。こんな提案を飲む必要はないし、なによりメリツトが少ない。ならこんな話はなかったことにすればいい。この場をとつとと去ればいい。

頭では解は出ている。

だが何かが解は間違っていると俺の足を止める。

溜息をついて頭をガシガシと搔く。

わかつている。何が俺の解を邪魔をしているかなんてとつくに理解している。どうやら俺には社蓄の才能があるらしい。思わず笑つてしまいそうだ。

俺は答えを決め、真つ直ぐヘステイアを見る。

俺の答えを彼女に伝えよう。

奉仕部としての答えを彼女に伝えよう。

「その依頼、引き受けよう」

あーあ、言ってしまった。もう後戻りは出来ない。

この解は間違っているかもしれない。だけど俺はこの解しか出せなかった。

俺が応えると思っていなかったのかヘステイアが驚きを露わにし口をポカンと開ける。自分から提案しておいて酷い反応だ。

「あと一つ言っておく。最優先は俺の命と元の世界に戻る方法だ。ヤバかったら逃げるし隠れる。アイツを助けるなんて二の次だ。それでもいいなら、俺はお前のファミリアになつてやる」

「うん、うん！ありがとう比企谷君！」

ヘスティアは満面の笑みで立ち上がり俺に抱き着く。おいやめろ、鬱陶しい柔らかい鬱陶しい鬱陶しい可愛い鬱陶しい！

必死の抵抗でヘスティアがようやく俺から離れる。危ない危ない、俺以外の人間なら勘違いして惚れてしまっているところだ。ぼっちでよかった。

冷静さを取り戻そうとしていると目の前にヘスティアが手を差し伸べる。えっ、なにこの手は？握手とかハードル高すぎませんか？

「これからよろしく！八幡君！」

眩しい笑顔を向ける彼女に、俺は手を握らずに顔を背ける。

ヘスティアは少し不満そうだが、俺は別に馴れ合うつもりはない。これは一時的な協力関係で、彼女は俺にとってはただの依頼者だ。だから仲良くなる必要なんてない。

そう考えていると彼女は俺の右手を掴み、無理矢理手を繋ぐ。先程の眩しい笑顔に少し青筋を入れて、今度は有無を言わさぬ力強い言い方をする。

「これからよろしく！八幡君！」

「よ、よろしく…」

ヘスティアに圧倒され、小声で返事をする。

何故だろう、セリフは同じなのに威圧感が半端じゃない。

こうして俺はベル・クラネルと同じ、ヘスティア・ファミリアのメンバーとなった。

これが俺の、冒険者としての物語の序章である。

第3話

昨日は色々なことがあった。俺の人生の中でもこれだけの出来事があった1日は中々ないのではないのだろうか。まあ俺の毎日は基本何もない1日が多いんですけどね。

だが昨日はそれでも異例中の異例だろう。

眼が覚めるとダンジョンにいて、ミノタウロスに追いかけられ、金髪女剣士に助けられ、神様と出会い、そして神、ヘステイアの眷属となった。

昨日ヘステイア・ファミリアに加入することを決めてからも忙しい活動をしなければならなかった。まずはファミリア入団の儀式、背中に神の恩恵を刻む事によって俺は正式にヘステイアの子、ヘステイアのファミリアの一員となったのだ。

その後ダンジョンをベル・クラネルと共に運営管理するギルドへと向かい、ダンジョンに潜る為に手続きを行う。身分証明書等は必要なかったのでスラスラと手続きは完了した。結構管理甘くないか？

その際俺のダンジョン攻略アドバイザーも決まったのだが、ベル・クラネルと同じアドバイザーらしく、ベル・クラネルと仲睦まじく話していた。おい、俺のアドバイザーですよねー？ボクのこと見えますかー？

ベル・クラネルとの会話を聞いている限り大分お節介な性格のようで、危険を省みずに五層まで行ったことを注意したり、俺たちを助けた金髪女剣士の情報を教えてくれたりと、どうやらベル・クラネルのことはお気に入りようだ。いやだから俺のアドバイザーでもありませんよね？

その後ギルドから借金をする形を取り装備品を買いに行くことになった。

どんな装備品が良いかと言われて真っ先に刀と答える。だって格好いいじゃん刀、日本刀とかあれば超嬉しい。だが現実は厳しく、格好いい武器はどうしても予算をオーバーしてしまい、仕方なく刃渡50cm程の細身の両刃直剣を購入する。少し重たい気もするがいず

れ慣れるだろう。

その後は防具の購入。ベル・クラネルのように胸当てだけでは心許ないので安物ではあるが盾を購入する。胸当てと盾、そして剣を装備するともう冒険者の出で立ちな気がしてくる。やだ、俺格好いい気がする！

装備品の購入も終わったところでヘステイア・ファミリアのホームである協会跡地へと戻る。その日の内にダンジョンに潜る事も出来たが、準備をきちんとする為にもダンジョン初挑戦は翌日にすることとなった。

そして今日がその翌日である。まさかの朝五時にベル・クラネルに起こされて、準備を整えて街へ出る。ああ、起こされるなら小町に起こされたい。だいたい朝五時起きてなんだよ、あと七時間は寝かせてくれよ。むしろ起こさないで欲しい。

睡眠不足で頭がクラクラする、正直に言えばダンジョンに対する不安と元の世界に戻る方法が気掛かりで余り寝付けなかった。来た方法があるなら戻る方法だつてあるはずと樂觀視するのは簡単だが、しかしそれでは思考停止だ。何も解決しない。俺が元の世界に戻る為には常に考え続けるしかない、些細な情報も、見逃しそうな違和感も全て広い集めるぐらいの気概でなければ事態が好転したりはしないだろう。

ダンジョンに向かう為、ベル・クラネルと共に街のメインストリートを歩く。朝早いお陰で人混みも喧騒もない。街にいる人間は開店準備をしている人ぐらいしか居ないので実に静かだ、気分がいい。この良い気分のまま帰りたい。

働きたくない気持ちが強くなる一方で、ダンジョン探索に対する不安が少しずつ広がっていく。やべー死んだらどうしよう。超怖い。

恐怖心を紛らす為、ベル・クラネルに話を振ることにする。

「なあベル・クラネル。ダンジョンってのはやっぱり危険なんだよな。怖いから帰っていい？」

「ベルでいいよ。危険だけど恩恵を受けてるし、それに二人での探索

だから早々危険な目には合わないんじゃないかな？一緒に頑張ろうよ！」

ベル・クラネルは爽やかスマイルを浮かべて俺にエールを送る。うわー、コイツリア充タイプだよ、しかも俺の帰ろうって提案を自然に潰してきた。案外強かなのか？

「…恩恵を受けても俺は素人だからな。期待すんなよ」

「僕もまだまだ初心者だよ。でも仲間がいると思うと心強いよ！」

凄く嬉しそうにベル・クラネルは言う。仲間になったつもりは毛頭無いんだが、まあ今から一緒にダンジョンに行くんだ。嫌われてダンジョンに一人置いてけぼりにされたら堪ったものじゃない。余計な茶々は入れないでおこう。

そんな会話をしているときに、違和感は起こった。

視られている。誰からかはわからない。だが確実に、何者かに視られている。

ねっとりした、それでいて異常に冷たく、そして削り取るような視線。

気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い！

奇異の視線に晒されることは今までもあった。敵意にも嫌悪にも慣れている。周りの目なんぞ鼻笑って無視出来る自信がある。だがこんな感覚は初めてだ。思わず吐き気が込み上げる。なんだ、誰だ、誰だ！

周りをぐるりと見渡すが不審な人物は見当たらない。だが確かに、確かに今視られていた。

ふとベル・クラネルも周りを見渡しているのに気づいた。もしかするとコイツも今の視線を感じたのだろうか？

こんな気色の悪い視線がこの世に存在するものなのだろうか。警戒心を張り巡らせ、緊張感を高める。

「あの…」

「！」

背後からの声に咄嗟に飛び退き、剣に手を掛ける。自分でも過剰な反応だとは思うが、異世界なんてイレギュラーで命の危険まである場所ですら正常な反応をしろと言う方が無理なのだ。俺は悪くない。

声をかけてきたのは薄鈍色の髪色をした少女だった。エプロンを着けているのを見る限り、何処かのお店の従業員のように見える。ただ、まだ見えるだけだ。先程受けたばかりの視線を考えれば油断は出来ない。警戒心は緩められない。俺の睨むような目を見て少女は少し怯えた様子を見せる。それは睨まれたのが怖いのかい？俺の目が腐っているのが怖いのかい？

「ご、ごめんなさい！ちょっとびっくりしちゃって……！」

ベル・クラネルが慌てて少女に駆け寄って謝る。少女を驚かせてしまったことに負い目を感じているようだ。もうベル・クラネルは警戒を解いているようだが、俺は少女が話しかけてきたタイミングがどうしても引つかかる。都合のいい展開や偶然の出会いというのは人為的な側面がある。

彼女が話しかけてきたのは本当に偶然か？先程の視線は、この少女とは無関係なのか？嫌な想像ばかり働く中、ベル・クラネルと少女の会話が進んでいく。

どうやらベル・クラネルが落とした物を拾ったらしい。あれは昨日ヘステイアから説明を受けた魔石だろうか？

どうしても言葉や行動の裏を考えてしまう。本当にベル・クラネルが魔石を落としたのか？彼女に嵌められてはいないだろうか？我ながらネガティブだとは思う。だが命が関わる可能性がある以上、普段以上に感覚を鋭敏に、言葉の意味を読み取る。

更に話が進み、ベル・クラネルのお腹の音を聞き少女は自分の朝食であるパンとチーズを渡す。これは俺の自論だが、親切で優しい女子なんて存在しない。女子は基本的に強かだ。友達付き合いでさえ自分の利益を考える、彼氏だって自分のステータスを上げる為の装飾品だ。

女子が見知らぬ他人に親切を働く？優しくする？そんなものはフィクションの世界だ。作り物で、偽物だ。こんな皆が憧れる優しく

て可愛い良い子を演じれるコイツには間違いない裏がある。

話は続き、パンをくれる代わりに自分の働いている酒場に食事に来て欲しいと条件を出してくる。いや条件なんていう聞いて不快感を覚えるものではなく、お願いという拘束力のないものだ。だがしかし、女子特有の優しさや魅力、断り辛さを十二分に活用した、そして、それが本命であると錯覚させるための言葉巧みな交渉術。

背筋がゾツとする。なんだこの作り物みたいな会話は。まるで台本が用意された物語を覗かされているような気持ち悪さ。

不気味の谷という言葉がある。人間に近づき過ぎたロボットはあんなにラインを越えると強い不快感や恐怖を覚えることである。今の状況はそれに近い気がする。…俺の目の前にいる少女は、一体何だ？

「それじゃあ今日の夜に…」

「遠慮しておく」

ベル・クラネルの言葉を遮るように口を挟む。思わず声を大きくしてしまったことで場がしんと静まり返る。我に返り羞恥を感じるが、それ以上に俺はこの少女から離れたいという気持ちが強い。

「えっと…私何かしちゃいましたか？」

困ったように笑顔を浮かべながら少女は言う。その笑顔には困惑は浮かんでいないが、怯えや不快感は感じられない。だが、それがまた俺に違和感を与える。普通初対面の男に大声で否定をされたら誰だって怒りや悲しみを覚える筈だ。ましてや俺に誘いを拒否なんかされた女子は次の日には俺の悪口をクラス中に言いふらすレベルで怒りだす。ソースは俺。

だが、それでも彼女はこの俺相手に嫌な顔一つしない。彼女は熟知しているのだ。男性がどういう反応をするば喜び、感謝し、幻滅するのかわかる。そして彼女は望まれた姿を演じきっている。それは何よりも異常で、何よりも異形だ。

「比企谷君、急にどうしたの？」

「や、ほらあれだ。酒場の料理の値段も知らずに行く約束なんてしてぼったくりだったらどうする。今日は俺の戦闘経験を積む為のダンジョン探索だろ？収入も普段より少ないだろうしやめといたほうが

いいって」

本心を隠し、それらしい理由をでっち上げる。こういった場面で必要なのは嘘をつかないことだ。嘘ではなく、本音だけで理由を作り上げることで、「なら仕方ないね」と自然に諦めのつかせれる体裁を生み出せる。断って欲しいならいちいち誘ってくんよ、毎回違う理由考えるの大変なんだぞ齋藤。

確かにとベル・クラネルは思案する。それでいい。お前がきっぱり断ればこの話は終わりだ。これ以上この場に居続けたくないから早くしてくれ。

だが俺の考えとは裏腹に、ベル・クラネルは予想斜め上の回答を弾き出す。

「でも、折角だし行ってみない？比企谷君の、八幡君の歓迎会としてさ！」

最悪だ。

ベル・クラネルが打ってきた一手は今の攻勢を一気に覆す最悪の一手だ。本音に本音を被せる。しかも俺がやめとこうと言った理由は要約するとお金がないということだ。それをベル・クラネルは歓迎会という今回だけという真正面からの理由付けで潰してきた。

「いや、俺の歓迎会なんて必要ないだろ？それより今後のことを考えればお金はとって置いたほうが…」

「僕、仲間が出来るの初めてだから、嬉しいんだ。だからお祝いしたいんだ。ダメかな？」

無邪気だ。疑うことを知らず、素直に自分の気持ちを出せる。そんなベル・クラネルは何よりも純粹で、純粹が故に危うさを孕んでいる。ベル・クラネルはまだ人としては未完成だ。人は社会に身を置き、人を知ることによって成長をする。ベル・クラネルはまだ人を知らなすぎる、知らなすぎるからこそ人を無条件で信頼する。美德と呼べるのかもしれないが、それはガラス細工のように少しのことで砕け散る可能性を持つ。ヘステイアが心配するのはベル・クラネルのこういうと

ころか。

そしてベル・クラネルが言っているのは理屈ではなく感情論だ。だから例えどんなに否定してもまた別の意見を提示してくるだろう。それが理屈が通っていないくてもだ。言わば子供の我儘だ。だからこそ論破も否定も意味がない、時間の無駄だ。

ここでの問題が収集が不可なのであれば、別の手を打つしかないな。

「…今回だけだ。歓迎会とか騒がしいのは俺は苦手なんだ。それと初探索でヘトヘトになるだろうから早めに切り上げる。それでいいなら構わん」

一度だけ。早急に切り上げる。俺が取り付きたい本命の約束を自然に入れ込む。これでこの少女との関係は今回だけに出来るし、なるべく関わらないでいられる。そしてベル・クラネルも満足する。完璧だ、自分の手腕に惚れ惚れするぜ。

ベル・クラネルも納得したようで、ありがとうと俺に感謝の言葉を告げる。言葉とか要らないから夜にここに寄らないとかしてくると八幡的に超ポイント高い。

「ふふっ。では歓迎会ということで、とびきりの料理と飲み物を用意しておきますね！」

彼女は見る人を恋に落としそうな程の素敵な笑顔でそう言った。

やべえ、俺が訓練されたぼっちじゃなかったら好きになって告白して振られてるところだったわー。振られんのかよ。

いつものように脳内シミュレーションをするが、恐らく彼女はそんな簡単な相手ではない。人を虜にする魅力の化物、ここまで人心を熟知し、完璧にこなせる人物を俺は知らない。雪ノ下さん以上の傑物だ。

「あ、僕ベル・クラネルって言います。貴方のお名前は？」

「シル・フローヴァです。ベルさん。あとえつと…」

2人で自己紹介をした後、シルと名乗った少女が俺を見る。これって自己紹介しなきゃいけない流れなの？出来ればこれ以降関わり合いいになりたくないんですけど…

「…名乗る程の物じゃございませぬ。好きに呼んで下さい」

「わかりました！では八幡さんとお呼びします！」

名乗ってないのに下の名前と呼ばれた。なにエスパーなの？

よくよく考えるとベル・クラネルが俺のフルネームを口にしてたのを思い出す。碌なことしねーなコイツ。まあいい、どうせ今日だけだ。それ以上関わるつもりはない。この少女も明日には、あの目の腐った人の名前なんだっけ？となるに決まっている。

それと俺を八幡と呼んでいいのは戸塚だけだ。材なんか？そんな奴知らん。ああ戸塚を思い出したら無性に会いたくなる。とつとこんな世界から抜け出そう、戸塚の為に！

「では、冒険者さん。頑張って下さいね！」

少女は笑顔で手を振り俺たちを送り出す。

照れて笑顔を浮かべるベル・クラネルとは対照的に、俺の心は全く晴れず、憂鬱な気分のままダンジョンへと向かう。幸先の悪い冒険になりそうだ。

第4話

シル・フローヴァと別れた後、予定通り俺とベル・クラネルはダンジョンへと向かう。向かう道中でベル・クラネルにダンジョンについて聞いたが、どうやら他の冒険者もダンジョンについては詳しくは知らないらしい。

神達が下界に降臨する以前からダンジョンは存在していたらしいが、その神達は余りダンジョンについて深くは考えていないそうだが、もしかすると知られると神達に不利益な情報があるのかと勘繰ってしまう。元々物事を深読みする癖はあったものの、どうもこちらの世界に来てからというものが深読みが過ぎてしまう。だが俺はこの世界の神すら知らない異世界へと帰る方法を見つけなければならぬ。どうしても気が張り詰める、些細な挙動が、違和感が見逃せず余計なことまで考える。

慎重に徹しているのではない、これは焦りだ。自分のことを冷めている人間と思っていたが、案外そうではないようだ。そういえば一色にも似たようなことを言われた気がする。簡単に揺らぐアイデンティティを個性とは言わない、では個性とはなんなのだろう。この状況で揺らがない個性とはなんなのだろう。思考が帰結しないまま、俺はついにダンジョンの探索を始める。

ダンジョンの第一階層。俺の冒険の始まりである。

早朝の為、他の冒険者の数は全く見えない。どうせなら他の冒険者の戦い方も見てみたかったが、あまり人が多いのは気が滅入るので人が居ないのは気分的には助かる。恥をかいても誰にも見られることもない。経験者と言うのは初心者に失敗を見下して笑う傾向がある。サッカーの授業で調子にのるサッカー部員の様なものだ。そう考えると冒険者と言う職業はそういった上下関係に敵しそうな気がしてしまう。初心者の癖に生意気だぞ！といったジャイアニズムの冒険者とか絶対いそう。会いたくないなあ。

ベル・クラネルの話を聞くと、モンスターはダンジョンから生まれるらしい。原理はわからないが、壁や地面からモンスターが出てくる

のを目の当たりにすると納得せざるを得ない。もしかして俺も壁とかから出てきたのか？ 気持ち悪いので違う方法であって欲しい。

ベル・クラネルに師事を受けながらも順調にモンスター討伐は進んでいく。基本としては俺はベル・クラネルのサポートだ。

いきなり一対一は大変だというベル・クラネルの厚意から、ベル・クラネルが倒し損ねたモンスターやダメージを与えて弱らしてくれたモンスターのトドメを俺が刺す戦法を取る。美味しいところ取り、なんといい言葉だろう。完全に寄生プレイヤーである。

途中コボルトという犬の頭のモンスターの大量発生に何度も遭遇したり、ゴブリンの大量発生に遭遇したり。昨日のミノタウロスとい、もしかして俺は呪われている？ 目が腐っているのがいけないの？ ベル・クラネルもこんなハプニングは初めてと言っていたので普段はここまでモンスターは多くはないのだろう。

だがお陰で想像より早く戦闘に慣れてくる。所詮初心者に毛が生えた程度の戦闘の慣れではあるのだが、ヘスティアから受けた恩恵の効果はきちんと発揮され、貧弱な俺でもモンスターを討伐することが出来ている。本当にゲームを実体験している気分だ、正直少し楽しい。

モンスターを倒し、倒したモンスターから落ちる魔石や極稀に落ちるドロップアイテムを拾い、またモンスターを倒し、魔石を拾い、荷物が一杯になれば地上に戻り荷物を換金する。これをひたすら繰り返して夕刻になったところでヘスティアの待つホームへと帰る。

「今日は八幡君のサポートもあつたお陰で凄く戦い易かったです！ 荷物も一杯持てたから収入も多かったですし、やっぱり仲間って大事ですわね！」

帰路の途中でベル・クラネルが言う。俺からしたら足手まといの俺をサポートしながら戦わせたみたいで心苦しさもあつたのだが全然気にしていないようだ。

「サポートなんて出来てないだろ。足を引っ張ってたただけだ。ま、荷物持ちとしては役に立ったかもな」

どうやら冒険者の中にはサポーターという非戦闘員の職業もあるらしい。戦わずにして収入を得る。なんと素敵な職業だろう、装備を整える前に知っていれば最初からサポーターになるって言っていたのに。

「足を引つ張ってなんかいいですよ。僕も初心者だから説得力ないかもしれないですけど、余計なことをしないとどうか、冷静に判断していると言うか、凄いなって思います!」

普段は基本的に罵倒、もしくは呆れられることが多いので、こうして褒められると、慣れていない所為で背中がむず痒く感じる。ただ余計なことをしないって褒めてるの?もつと働けてこと?

「…そんなことねえよ。なるべく働きたくないってだけだ。人命第一、俺の命第一。危険な目には会う前に逃げる、絶対に冒険なんてしないが今の俺のモットーだ。むしろ本当ならダンジョンにだって潜りたくなんてない」

「あはは…でも冒険なんてしないってのは正しいんだと思います。エイナさんも」冒険者は冒険しちやいけない”って口うるさく言ってるので」

「エイナさん?誰それ?」

初めて聞く名前だったので尋ねるとベル・クラネルは驚きの表情を浮かべる。なんでも昨日ギルドで出会ったダンジョン攻略のアドバイザーの女性の名前が”エイナ・チュール”と言う名前らしい。

名前ぐらい覚えてあげようよとベル・クラネルが呆れ混じりの笑顔で言うが、そもそもきちんと自己紹介をした覚えがない。殆どベル君にも仲間が出来たかーとか仲良くしてあげてねとベル・クラネル関連の話ばかりだった気がする。仕事しろよアドバイザー。ただ知り合いの声に少し似ているので、正直あまり話掛けて欲しくはない。それある!

ベル・クラネルと会話を多少交えながら街を歩き、ホームである教会跡地地下室へと帰ってきた。

ヘステイアとダンジョンの感想等、雑談を少しした後「ステイタス」

の更新を行う。様々な出来事を通して手に入れた【経験値】を神の恩恵に付け足す事でレベルアップが出来るらしい。つまりこの【ステイタス】更新をしなければ強くはなれないということでもある。

ヘステイアに言われるまま上着を脱ぎ、ベッドへと寝そべる。背中に刺青のようにびっしりと刻まれた【神聖文字】。これが【神の恩恵】らしい。

ヘステイアは寝そべる俺の背中の上に馬乗りになり更新作業に入る。更新自体は直ぐに終わり、更新した【ステイタス】の内容を別の用紙に書き換えて俺に渡す。

比企谷八幡

L v. 1

力：I 38

耐久：I 52

器用：I 68

敏捷：I

50 魔力：I 0

魔法【

】

スキル【

俺は起き上がり用紙に書かれたステイタスを読む。聞くと【ステイタス】はSからIの上から10段階で表記されるらしい。下から数えた早い【ステイタス】に才能の無さを感じてしまっていたが、ヘステイア曰くこれぐらいが最初は普通、むしろ俺の今までの人生のすべての【経験値】を入れ込んだので初めての更新としては高いほうのことだ。

ふと【ステイタス】の魔法とスキルの欄に目を向ける。魔法の欄は最初から空欄が2つあるように見えるが、スキルのところはまるで最初は何か書いてあったのを消したかのように見える。気のせいだろうか。

「へえー。八幡君って魔法のスロットが二つもあるんですね。羨ましいなー」

「ん？どういうことだ？人によって数が違うのか？」

「うん。魔法はスロットの数しか覚えられないですよ。それで二つ以上スロットがある人は珍しくて、魔法を覚えたら色んなパーティーの勧誘が一杯くるぐらい凄いですよ!」

ベル・クラネルが興奮気味に俺に言う。だが俺は魔法の覚え方を知らないし、パーティーの勧誘なんて一杯きたところでコミュニケーション取れないからあまり得はしないな。

「成る程な。ちなみにレベルってのはこの「ステイタス」がMAXになれば上がるのか?」

「違うよ。そもそも【ステイタス】の【経験値】とレベルアップの【経験値】は別なのさ。普段の【経験値】より上の【経験値】。所謂偉業を成し遂げることでレベルアップの【経験値】が貯まるんだ」

ヘステイアが口を挟む。つまりわざわざ【ステイタス】をカンストさせなくてもいいらしい。よかった、ステイタスを全てカンストとか気が遠くなる。

「因みに、レベルアップって普通ならどれぐらいでできるんだ?」

「そうだねー、確か君たちを助けた女剣士のヴァレン何某君で1年ぐらいだったっけな」

は?1年?

1年ってあれだよな、365日の1年?こっちの世界だと1年は30日とかだったりみたいなの文化の違いはないですか?もしくはあの金髪女剣士さんが実は全然才能がなかったとか!それはないか。

突如打ち明けられたレベルアップする為の期間の長さに気が遠くなる。もし元の世界に戻る方法がダンジョンの最深部にあつたとしても、一体俺はレベルを幾つまで上げなければいけないかって、一体どれぐらいの時間がかかるのだろうか?そもそも俺はそんなに長い期間冒険者を続けられるのか?こんな命懸けの戦闘を、あと何回繰り返しさえいいというのか。夢半ばで死ぬ可能性だってある、むしろ俺だったらその可能性のほうが高いまである。

俺は本当に、

あの世界に戻ることができてるのか？

「…っ!!」

考えないようにしていた最悪の事態が頭を過る。眼を背けてた、現実を見据えず、有耶無耶にし、霞ませていた事実。冷静さという仮面を着けて誤魔化し、自分を騙し、至って普段通りを装うことでなんとか保っていた平静。

ダンジョン？モンスター？冒険？今の今まで何処か他人事のように、画面に映し出された映像のように、紙の上をインクで綴った物語のように捉えて逃避していた。飲み込んでいる振りを、理解している振りをすることで己を欺瞞した。

一度意識してしまえばもう止まらない。最悪の想像が、そして今まで関わってきた人物達の顔が、思い出が頭の中を駆け巡る。

人生なんて碌な物ではないと思っていた。俺の人生がではない、全ての人間の人生全てが碌な物ではないと。思い出なんて幻想で、絆なんてまやかして、人生なんて偽物の積み重ねだと。

ふと彼女たちの顔を思い浮かべる。

彼女たちに二度と会えないかもしれない。その現実が俺の頭の中で痛みを伴いながら駆け巡る。

呼吸が荒れる、鼓動が早まる。脳が、精神が現実を拒否して自分の意識を強制的に閉ざそうとする。このまま夢の中で過ごしたほうが幸せなんじゃないか？なんて甘言が己を誘惑する。甘言を振り切ろうとすれば今度は黒々とした想像が意識を焼き切ろうとする。

「落ち着くんだ！八幡君！」

目の前の少女が上げた叫び声にも似た声に水でもかけられたように思考が止まる。その少女の表情は憐れみでも哀しみでもなく、一言で言うなれば慈愛に満ちた表情を浮かべていた。

「大丈夫だよ。八幡君」

そう言いながら俺の頭を手を回し、そつと抱き寄せる。普段ならその距離の近さにうんざりしているはずだが、今はそんな気は全く起きなかった。むしろどこか胸の奥で安心感すら抱いている。

「大丈夫だ。必ず君は元の世界に戻れるさ。来ることが出来たんだ、戻ることが出来るのが必然だろ？だから安心するんだ。神様のお墨付きだぜ、絶対に元の世界に戻れるよ」

ヘスティアは俺の頭を撫でながら、まるで子供をあやす様に俺に語りかけた。

安心してしまう自分に悔しさを覚えると同時に、ヘスティアってやはり神様なんだなと納得してしまう。落ち着きを取り戻すと急に恥ずかしさを感じ悪態を吐きながらヘスティアを払い除ける。近いんだよ本当に。

「…つか、ヘスティアって炉の神様で家庭生活の守護神ですよ。俺の今の事態とあんま関係ないからお墨付きでも意味ないでしょ」

「…ははーん。君は照れると悪態を吐くんだね。案外分かり易い性格してるね。可愛いところもあるじゃないか」

男の子に向かって可愛いとか言わないで！傷ついちゃうから！自尊心とか色んな物が傷ついちゃうから！顔を背けるが、背けた先にはベル・クラネルが暖かい目を向けていた。完全にコイツの存在を忘れてた、恥ずかしい！死にたい。

「兎に角！君は落ち着いて一歩ずつ着実に進むべきだ。焦りは禁物だぜ」

「…わかりましたよ」

先程の手間、体裁だけは納得をしておく。内心では半分は納得したというとかだろうか。誰がなんと言おうと、この世界に何年も滞在している訳にはいかない。何の情報もない八方塞がりの状況だが、それに甘んじてはならない。模索するしかないのだ。この世界を。ダンジョンを。

俺が密かな決意を固めた後、ベル・クラネルが「スティタス」の更新を行う。どうやら大幅な「スティタス」の向上があったらしく、異

様にベル・クラネルが興奮している。まああのダンジョン探索での戦闘は殆どベル・クラネルが一人でこなしていたようなものだ。急激に成長していてもおかしくはない。

だがベル・クラネルが成長したというのに、何故かヘスティアはほとんど不機嫌になっていく。なんだ、可愛いベル君が遅くなるのが嫌なのか？確かに俺も小町や戸塚が遅しく成長したら嫌だから気持ちにはわからんでもない。いや戸塚は実は結構遅しい気もしなくはないが、ムキムキな筋肉野郎にでもなったら枕を濡らす自身がある。

結局何故か怒り出したヘスティアに追い出される形で俺たちはホームを後にし、酒場に向かうことになった。正直行きたくはないのだが、ヘスティアを怒らせたことで落ち込むベル・クラネルを置いていくのは流石に気が引けるので、共に酒場に向かうことにする。

「…僕、何かわるいことしちゃいましたかね？」

落ち込んだベル・クラネルが尋ねる。どうやらコイツにとってヘスティアは余程特別な存在らしい。

「気にすんなよ。女なんて基本的に自分本意だから考えてもわからんぞ。性別が違えばもう別の生き物だって理解しとけ。そういう時は自分が悪いと思うな、全部社会が悪いって思っとけ」

「…八幡君は凄いな。色んなことを知ってて、自分をしっかり持っている。僕とは全然違うや」

「は？どこがだよ。この世界に来てから俺が個性だと思ってた物なんて揺らぎまくりだぞ。それに自分らしきなんて曖昧な物、他人が見てもわかりやしねえよ。まず自分自身もわかってなんかいないだからな」

「そうなの？」

「…俺の知り合いで自分らしきだったので悩んでる奴がいたんだよ。いや、きっと今でも悩んでるのかもな。誰かに憧れて、真似て、追いかけて、依存して。どんどん自分らしきなんてものを捨ててしまっただけ、挙げ句の果てには憧れた相手に詰まらないとまで言われちゃった。誰にも何にも影響されない個性なんてものはないのかもしれない、だ

けど何かを求めたらそれが個性になったりするんじゃないの？わかんけど」

俺の話聞いてベル・クラネルは何かを考え始める。きっと今の話はベル・クラネルにも当て嵌まる。恐らく憧れるだけでは駄目なのだ、追いかけるだけでは駄目なのだ。追い越さなければ、通過点にしなければ、この人間にすら追いつけない。結局答え出ないのかもしれない。だけどそれを理解して自分自身と見つめ合って、それがようやく個性になるのではないだろうか？

お互い無言のまま歩き続け、日も沈もうという頃合いに酒場へと辿り着いた。

『豊饒の女主人』ここが朝にあった少女の働いている酒場のはず。こっそり入り口から店内を覗き見ると、中にはウエイトレスさんがひーふーみー、、

嘘だろ、女性スタッフしかない。えっ敷居が高すぎませんか？もしかしてぼっちお断りですか、サイゼないの？帰っていい？

「ここ、だよね？」

ベル・クラネルが自信なさ気に俺に尋ねる。気持ちは痛い程わかる。今なら間に合う、違うお店に行こう。むしろホームに帰ろう。

目の前のお店は酒場というイメージとはかけ離れたオシャレな内装でシツクな雰囲気を持ち、だが酒場の雰囲気を崩していない。高そうだ、やっぱりぼったくりなんじゃないのここ。

「よし。帰るか」

「ええ!??まだ店に入つてすらないよ!??」

いやだつてもう入るまでもなく店員に話しかけられない自分が眼に浮かんでくるから。もしくは声出してるのに無視してくる店員さんとか。だから注文呼ぶベルみたいなのがないお店には基本行きたくないんだよ。

「ベルさん！八幡さん！」

気付くとベル・クラネルの隣に朝に会った少女、シルがいつの間にか笑顔で立っていた。クソっ！逃げられなかったか！

「…やってきました」

ベル・クラネルは観念したようで、作りきれていない笑顔を浮かべてシルに応える。そんな失礼極まりないベル・クラネルの態度と笑顔に対してシルは100点満点の対応をする。やはりコイツは胡散臭い、だが確証がある訳でもない。今日だけの付き合いと割り切り、俺たちはシルに案内されて店内へと足を運ぶ。この時の俺は、この後とんでもなく面倒な事に巻き込まれることになることを、まだ知らない。

第5話

シルに案内されるまま、俺とベル・クラネルはカウンター席に座る。案内する際にわざわざ声を張り上げて2名入りますとシルが言ったお陰で、店内のお客さんや他のウェイトレスに注目を浴びてしまう。本当に余計なことばかりしてくれるなこの女。

案内されたカウンターの席は曲がり角の席の酒場の隅に当たる場所だ。他のお客さんとは関わらなくて済みそうだが、カウンターの内側にいる割腹のいい女将と思われる女性と向き合う形になる。気を使ってくれたのかも知れないが俺にとっては逆効果だ。これでは注文をする際に女将さんとコミュニケーションを取らなければならぬではないか。食券機はないのか、食券機。

「あらーアンタらがシルのお客さんかい？二人共随分と個性的だねえ！」

個性的というのは決して褒め言葉ではない。俺のこの目を称する時によく使われる言葉であり、失礼に当たらず口を濁さない便利な言葉、つまりお世辞だ。学生によく使われるやればできる子と同じである。だがお客さんに対してのお世辞が個性的ということは、この店は客とスタッフの距離が近い、コミュニケーションの多い酒場なのかもしれない。寝たふりとかしていいですか？

どうやら俺の予想通りのお店のように、女将さんはベル・クラネルに対して話掛け始める。なんでもシルが女将に俺たちを大食漢だと伝えているらしく、ベル・クラネルが必死に否定している。

だがこの女将、遠慮なく話掛けてるように見えて、俺に対しては全く話掛けてこない。側から見れば俺だけ無視されているように見えるが、俺にとつてはその方が好ましい。もしかするとこな女将さんはお客さんを見て話掛けるかどうかを判断しているのかも知れない。見る限り様々な客人が来る酒場の様だ、となれば会話せずに飲みたい客もいるだろう。そんな客に話かければ諍いの元になる可能性もある。まあ俺が影が薄過ぎるだけという可能性もあるが。

「はいよーお待ちとおさんー！」

その声と同時に沢山の食べ物と飲み物がカウンターに置かれる。おい、注文より料理が多いぞ。どうなっている？

女将が言うには食べ盛りの冒険者なんだから一杯食べなとのことだが、押し売りもいとこだろう。むしろ詐欺だ、金払う必要あるのかこれ？ 見る、隣のベル・クラネルが青ざめた表情で値段を計算し始めたぞ。そもそも俺こんなに食えないぞ。

ちなみに置かれた飲み物はアルコールが入っている。最初に酒は飲まないと言った筈だが、この店にはどうやら客の意見を聞く気と遠慮がないらしい。店としては致命的だろそれ、二度とこない絶対に。

「楽しんでますか？」

食べ物を食べ始めたところでシルがやってくる。何この子ヒマなの？ ならこの大量の食べ物お前も食べる。そして料金も払って下さい。

「え、楽しんでるように見えるの？ ならせめて注文通り持ってきてくれない？」

「満足して頂いているみたいで良かったです！ あ、椅子借りますね！」
隣で圧倒されているベル・クラネルの代わりに皮肉を言ったのだが、当の本人はどこ吹く風で余っている椅子に腰をかける。：なんで隣に座っていらっしやるのこの女の子、勘違いしちゃうからやめて下さい。

「お店のほうはいいんですか？」

「キッチンが忙しいですけど、給仕のほうは充分間に合ってますので。今は余裕がありますし」

ベル・クラネルが尋ねるとシルはそう答えて女将さんにアイコンタクトをとる。コイツ想像以上に奔放だな。女将さんも大変だろうに。

それからというもののシルは積極的に話掛けてきた。基本的に相手をするのはベル・クラネルだが、シルは俺にも遠慮なく話を振ってくる上、キョどつても御構い無しなので凄く困る。コミュ力高い人ってなんでこんなにか話したがるの？

「私、知らない人と触れ合うのが、ちよつと趣味になってきているとい

うか、…その、心が疼いてしまうんです」

照れながら少女は言うが、正直全く理解できない。そもそも知らない人間と関わる必要性を感じない。人と交わろうなんて考えるのは群れなければ生きていけない人間か、一人で生きていくことが出来ない人間、もしくは他人を利用しようとする人間、これらのどれかだろう。俺？俺は小町と戸塚がいれば生きていける人間だ。

だがこの少女はどれも違う気がする。彼女は群れなくても平気で、一人で生きていくことも可能だろう。そして彼女は他人を利用しようとは考えてはいない。むしろそれ以上、もつと悍ましい考えを孕ませているような印象がある。まるでここは彼女にとって、狩場のような、そんな印象。

そんな事を考えている最中、恐らく予約していたのだろう、空いていた席に10数人の団体が現れる。団体の予約客が現れたところで普通は感心など持たないだろう。だが今この場の視線はその集団に集められている。どうやらアイツらが冒険者のトップカーストのようだ、素人目でも強者だとわかるほど彼等は実力者の風格を纏わせている。カツアゲとかされたらどうしよう。

それにしても今まで新体験ばかりで気が回っていなかったが、この世界には本当に様々な人種がいるようだ。この酒場の従業員にも童話等で有名なエルフもいるようだし、あの集団だけでも何種族が入り混じっているのだろうか。お陰で俺も余り目立たなくて済んで助かっている。昨日の買い物の際も店員さんに、その気色悪い目の友人さんは何の種族なんだい？とベル・クラネルが訪ねられるぐらい俺は亜人として馴染んでいる。あれ、なんか思い出したら眼から水が…

入って来た集団をそれとなく眺めていると、集団の中に一人、見たことのある人物がいるのに気づく。ベル・クラネルも気付いたように、顔を紅潮させてビクつと肩を一度震わせる。その人物に完全に眼を奪われてしまっているようで、ベル・クラネルに話しかけているシルに全く気付かずに、机に突っ伏したり、じつとその人物を見つめたりと奇行が止まらない。大丈夫かコイツ。

軽く嘆息し、ベル・クラネルが熱の込もった視線を送る人物に眼を

向ける。少女が靡かせる輝かしく美しい金色の髪が、少女自身が持ち合わせる凜とした雰囲気、その異質な集団の中でも更に異質さを際立たせる。

『剣姫』 アイズ・ヴァレンシユタイン

この世界で目覚めて直ぐにミノタウロスに襲われた時、俺とベル・クラネルを助け出した女剣士。ロキ・ファミリア所属のLv5、別名『戦姫』。

俺が彼女について知っているのはその程度だ。しかも全てベル・クラネルの受売りだ。というかベルの奴、あれからというもの事ある毎に剣姫の話ばかりしてきやがるから微妙な逸話まで覚えてしまっている。

恐らく今後関わる事なんてないであろう彼女のことについては俺自身は興味はないのだが、どうやら剣姫の所属するロキ・ファミリアは冒険者の中でも別格のファミリアらしく、そんなファミリアならば異世界のことを知っていないだろうかと望み薄な期待は抱いている。「よっしやあ、ダンジョン遠征みんなごくろうさん！今日は宴や！飲めえ!!？」

一人の人物が立ち上がり乾杯の音頭をとる。声からして女性だろう。彼女がああファミリアのリーダーだろうか？もしくは神様か？

それからというもののロキ・ファミリアは騒がしく宴会を始めた。シルが言うにはロキ・ファミリアはこの酒場のお得意さんらしく、遠征後などによく来店するらしい。その情報を聞きベル・クラネルが目を輝かせる。大方ここに来れば剣姫に会えるとか考えているのである。金も持ち合わせていないのに常連になるつもりか？俺はもう来ないけどな。行くなら一人で行けよ、絶対に誘うなよ。

「八幡さんもロキ・ファミリアの方々に興味があるんですか？」

どうやら自分が思っている以上にロキ・ファミリアを注視していたようでシルが俺に顔を近づけて言う。いや本当に近いからね、あまり男性に不用意に近づかない、ボディータッチしない、意味深な態度を取らない、そういう行動が健全な男子を死地に追い込むことを理解したうえでやっているんだらうなこの人は。女性って怖い！

「別に興味がある訳じゃないですよ。あんだけ目立っていれば嫌でも視界に入らなくてだけです」

「へえ、でもその割にはずっと見つめてましたよ。誰か知ってる人でもいるんですか？」

「俺に知り合いなんていいる訳ないじゃないですかー。俺以外の全員他人ですよ、他人。むしろ他人としても認識されないまでもある」

うわあと顔を歪ませて引き気味になるシル。やった、ついにこの少女の仮面の様な笑顔を崩してやったぞ！あれ、俺の方がダメージ大きくない？

アルコールが回ってきたのが、ロキ・ファミアのメンバーであるう銀髪の青年が声高々に剣姫へと話しかける。その青年はフィクションのキャラクターによく見る獣耳を頭に生やし、いかにも狼という雰囲気を見せている。

「そうだ、アイズ！お前のあの話を聞かせてやれよ！」

「あの話……？」

「あれだって、帰る途中で何匹か逃したミノタウロス！最後の一匹、お前が5階層で始末しただろ！？？そんで、ほれ、あん時いたトマト野郎共のー！」

青年の言葉でベル・クラネルの肩が揺れ、ゴクツと唾を飲み込む音が聞こえる。隣にいる少年は恐らく気が気ではないだろう、今青年が話題に出したトマト野郎共というのはほぼ間違いなく俺たちのことだ。言葉のニュアンスからほぼ間違いなく俺たちのことを面白おかしく話してくれるのであろう。冗談を混じえ、罵詈雑言を加え、愉快に語って場を盛り上げるのだろう、他人の悪口はコミュニケーションを最も円滑にするツールだ、俺のクラスメート達も俺の悪口で場を盛り上げていた。なんだよ喋ったこともない癖に俺を話題に出すなよ。名前知らねえよ、誰だよお前ら。

俺にとってはそんなのは慣れっこなのでまるで気にも止めないが、剣姫に憧れるベル・クラネルからしたら心中穏やかではないだろう。

それからの青年は酷かった。胸糞が悪くなるだの、弱虫野郎だの、抱腹ものだっただの、冒険者になんかなるんじゃないやねえだの、俺たちの

品位が下がるだのときも楽しそうに俺たちの話を饒舌に語る。いや、お前の今の言動が自分の品位を下げてると思うけどね、もう下品レベルまで落ちてるでしょ。

正直下らない男だと思った。今の自分の強さに自信を持ち、初心を忘れて他者を乏しめる。自らの価値観が正しいと思い込み、その価値観を他者に押し付ける。自分の行動や言動で和が乱れたとしても青年は気にもせず、誰に咎められようと鼻で笑う。そんな傲慢さを青年は悪びれもせずひけらかす。出来れば永遠に関わり合いにならないです。

そんな青年の態度と言動が気に障ったのか、緑髪の女性が言動を咎める。が、やはり青年は気にも止めず、挙げ句の果てにはゴミをゴミと言って何が悪いと開き直る始末だ。ゴミと言われるのにも慣れてはいるが、ここ迄清々しいと逆に関心してしまう。

ふと隣のベル・クラネルに目を向ける。顔は青ざめ、歯はカチカチと噛み合わずに身体を震わせる。最早彼に平静さなど皆無だ。きつと今にも逃げ出したいだろう、それが出来ないほど少年は追い詰められている。これはもうマズイか？

そんなベル・クラネルの気など知る由もなく、青年は剣姫に矛先を向ける。

「アイズはどう思うよ？モンスターに手も足も出せずに地べたに転がるだけの情けねえ野郎を。あれが俺達と同じ冒険者を名乗ってるんだぜ？」

「…あの状況じゃあ。しょうがなかったと思います」

「何だよ、いい子ちゃんぶつちまって。……じゃあ質問を変えるぜ？あのガキと俺、ツガイにするならどっちがいい？」

荒々しい声で剣姫に青年は詰め寄る。え、何コイツとんでもないこと聞いちゃってんの？周りが酔ってるの？と心配しているが、酔ってるからと言ってはしやぎ過ぎじゃないのか。明日には何も覚えてなくて、周りから昨日のことを聞いて赤面するパターンか？お酒って怖い！俺は飲まないぞ！

素気無く剣姫に振られるが、青年は御構い無しに言葉を続ける。ど

うやら青年は劍姫に気があるようで、圧倒的な強さを持ち合わせる劍姫に相応しいのは弱い人間ではなく強い俺だと言いたいのだろう。分かり易いが、その詰め寄り方は逆効果なのではないだろうか？

「自分より弱くて、軟弱で、救えない、気持ちだけが空回りしてる雑魚野郎に、お前の隣に立つ資格なんてありはしねえ。他ならないお前がそれを認めねえ」

雑魚じゃあアイズ・ヴァレンシユタインには釣り合わねえ」

その言葉は、今のベル・クラネルにとっては致命的だった。

唇を噛み締め、椅子を飛ばして立ち上がり、一目散に店から飛び立した。

憧れを否定され、気持ちも否定され、自分を否定された。彼はまだ子供だ、人も十分に知らない幼い子供だ。人の汚い部分に慣れていないからこそ、心ない言葉が少年を傷つける。

「ベルさん!?!?」

シルがベル・クラネルの行動に驚き声を上げるが、彼には聞こえていない。きつと声が届いていたとしてもベル・クラネルは止まらなかっただろう。むしろここに留まれば彼は更に傷つくことになる。

意外だったのは劍姫が立ち上がりベル・クラネルを追いかけたということだ。もしかすると彼女の眼は逃げ出したベル・クラネルの姿を捉えていたのかもしれない。だが彼女がベル・クラネルを追いかけてどうする? 謝っても、連れ戻しても、ベル・クラネルの自尊心を踏み躪ることになる。彼女は今はベル・クラネルに会うべきではない。それは明白だ。つまりこの場合俺に出来ることは何も無い。あつたとしても実行する気は更々ない訳だか。

だが一つ、彼が逃げ出したことにおける最悪の問題が生じている。

俺には、お金がない。

今回のダンジョン探索の報酬は全てベル・クラネルが持っている。元々今日の支払いはアイツが払う予定だった為、俺は一銭たりとも持っていない。

やべー、どうしよう。頼みの綱になりそうなシルはベルを追って外に出て行ってしまったし、目の前の女将さんめつちや武闘派っぽいんだけど、金がないなんて言ったらボロ雑巾みたいにされそうなんです。こんなことなら俺もどさくさに紛れて逃げればよかった。ベル・クラネルめ、一生許さん。

必死にこの場を納める方法を考える。いざとなれば靴舐めも土下座も余裕だが、今正に貶されたばかりでそんな行動をすれば、劍姫のベル・クラネルの心証が更に悪くなってしまう。アイツが起こした行動の結果なのだから自業自得だとは思うが、アイツのせいで俺が実害を受けるのは許容しがたい。自分のミスですら叱られたくないのに、他人の罪を被るなんて真つ平御免だ。

だとすれば…

「あの、すみません…」

意を決して女将さんに声をかける。一緒に来た相方が今先程逃げ出したばかりなため、女将さんは眼を細め、愛想無く一言、なんだいと返事をする。威圧感で尻込みしそうになるが、ここでたじろぐ訳にはいかない。意を決して女将さんに話し始める。

「い、いや、申し訳ないんですけど、財布を持っていたのが先程隣にいた奴でして、今店を飛び出してしまったのでお金が…また後日返しますので貸しにツケにして貰えたりしませんか？」

「はあ、そんな言い訳が通用すると思ってるのかい!?? ありや立派な食い逃げだよ! 一体あの子は何で店を飛び出したんだい!??」

こ、怖えー!! 迫力に圧倒されて今にも逃げ出したいが、何とか堪える。いい感じで店内の注目が俺に集まっている。そりやそうだろ、散々食事して相方は逃げ出したうえ金がないなんて言ってるんだ。しかも女将さんの怒鳴り声まである、皆俺に視線を向けるだろう。

これでは完全に見世物だ。だがこういう場で見世物になるのは俺の役目じゃない。俺は誰にも意識されることのないぼっちだ、注目さ

れるなんてのは別の目立つ人間がされればいい。俺の代わりに注目を浴びるなんてこと彼等には役不足かもしれないが、スポットライトは浴びるべき人間が浴びるべきなのだ、適材適所だ。つまりこの場において脚光を浴びるべき存在とは…

「いや、実はあそこの銀髪の人が散々悪態をついたトマト野郎ってのは自分達のことです。俺なんてダンジョンに入って2日目なのに、余りに酷いことを言うので彼ショックを受けちゃったみたいでして、本当に申し訳ないです」

「あア!?」

突如自分に矛先が向き青年は声を上げる。そう、これが俺の策！擦りつけ大作戦だ！この作戦の肝は如何に自分達が被害者だとアピール出来るか、この一点ただ一つ。演技には自信はないが、この場を乗り切る為にあの銀髪には犠牲になって貰う、犠牲の犠牲になー!

「目の前であんなにバカにされたら誰だって凹むじゃないですか。アイツ責任感じちやっつたつぽくて。明日には必ず返しに来るので、お願い出来ませんか?」

今店内の人たちがまだ小声ではあるがああ銀髪を批判する声を上げています。喜べ銀髪、普段はその位置にいるのは俺の役目だが、今日はお前に譲つてやる。

不穏な空気を察したのかロキ・ファミリアの連中がざわつき始める。中にはベート君謝ったほうがいいよなんて言っている女性もいるが、それは銀髪にはまるで意味がない。その言葉は銀髪の首をさらに締めることになる。

「ふざけんなツ!!?なんで俺が謝んなきゃやらねえ!!?雑魚に雑魚言っただけだろうが!!?くっだらねえ、俺には関係ねえだろうが!!」

銀髪が威勢良く吠えるがそれでは逆効果だ、言い訳にすらなっていない。もしくは弁明する気もないのだろう。むしろそのスタンスの

ブレなさには驚嘆さえする。だがその他を圧倒する自己主張は周りが見れば不快の以外の何物でもないだろう。

さあ数の暴力の完成だ。今の言葉でこの店に銀髪の味方はほぼいなくなっただろう。恐らく自分のファミリアの中にも今回の件に關しては味方は少ないはずだ。何故なら銀髪が乏しめた俺達が店に居ると知る前からアイツらは多少だが揉めていた、ならこの一石が投げられればどうなるかなど明白だ。

「ベート。口を慎むんだ」

その一言で場の空気が一気に凍り付く。彼等のファミリアだけではない、周りの無関係な客や店員も声を鎮める。彼がこのファミリアのリーダー、いや冒険者のトップカーストであることを一瞬で理解する。

その声を主は風貌は金髪碧眼で、どう見てもベル・クラネルより小柄の少年だ。子供と言っても差し支えはないと思う。だが纏わせている風格が彼が子供であることを否定する。人を見た目で判断するなどとはよく言われているが、これ程その言葉を思い知らせる人間はないであろう。

「すまない。此方も酒が入っていたとはいえ、公共の場での配慮が足りなかった。心から謝罪させて欲しい」

「あ、い、いえ…」

思わず気圧され言葉を詰まらせる。少年の言葉には誠意は込められていた。謝意も敬意すらも込められていた。そんな言葉を、少年からすれば見たこともない、ただ因縁を吹っつけただけにしか見えない男に躊躇いもなく言うことが出来るということに驚嘆する。これが頂点の冒険者を率いるリーダーの器というものなのだろうか、とてもじゃないが真似できたものじゃない。

「此方が悪いのは重々承知した上で、不躰なお願いをさせて貰って構わないかい？これはそちらも同じ考えだとは思うけど、此方としてはあまり事を大きくしたくはない。今回は穏便に済ましてはくれないだろうか？勿論無条件という訳じゃない。今回の君たちの支払いは僕が持とう。それで収めてはくれないだろうか？」

うわー、完全に見透かされちゃってるよ。彼は謙って言ってくれているが、穏便に済ましたいのはむしろこちらのほうだ。争っても勝ち目もメリツトも何もない。更に言えばきつと彼らは俺の噛み付き程度では何一つ地位も名誉も揺るぎはしないだろう。それでもこちらからしたら望みどおりの条件を提示するということは、それ程どうでもいい相手ということだ。それこそ相手をする必要がないほどに。「どうだい？」

少年は笑みを浮かべて問う。彼には確かに誠意はあった、だが対等には見てはいない。実際対等ではないのだろう、俺はビギナーで彼らはトップカーストの人間だ、肩を並べるのなんて烏滸がましいにも程がある。

だが俺は少年の言葉と笑みが気に入らない。その見下した態度と驕りが、そしてその取り繕う笑みが、あの男を連想させる。

きつと俺が今からする発言は支離滅裂だ。自分から絡んでおいて提示された好条件を蹴るのだ。周りからすれば理解不能だろう。だが、それでも、俺はあの男に頼るのだけは御免蒙る。

「いや、いいわ」

再び場の空気が凍り付く。少年の貫禄で静まり返った先程とはまるで意味合いが違う、きつと誰一人俺の発言を理解出来てはいないだろう。だってそうだろう、断るデメリツトがない程の、俺に不利益が一切ない条件を切り捨てたのだ。

「…意外だね。訳があるなら聞こうか？」

少年は困惑を隠して笑みを崩さずに俺に問う。

本当にこの少年はあの男に似ているが、アイツよりも好戦的な気もしなくはない、もしかするとこの少年とあの男だと何かが根本的に違うのかもしれない。

だが今それは関係ない。俺はこの少年の内面には興味がない。だから気にせずに俺は言う。

「俺は養われる気はあっても、施されるのはご免だ。女将さん、悪いんですけど明日必ずお金持ってくるのでツケといって貰えませんか？」

もう少年には言いたいことは言った、もう話すことはない。少年か

ら視線を外して女将さんに話しかけたところで、彼らの席の辺りから怒号が飛んでくる。

「気にいらねえなツ!!?」

テールを叩きつけて俺を睨みつけ銀髪の青年は吠える。

立ち上がるやズカズカと俺に近づき、襟首をつかんで俺にぶつける様に青年は言葉を言う。

「聞いてりゃ雑魚がいい気になってんじやねえぞ。施されるつもりはねえだ☒テメエら雑魚共は俺らに施されるのを拒否する権利もねえんだよ。あんま口答えしてんじやねえぞ!!?」

それはまるで雄叫びにようだった。野獣を連想させるような眼つきに思わず怯む。だがここで屈するのは悪手だ、その動揺を表に出す訳にはいかない。ワザとらしく笑みを浮かべ、挑発するように言う。「うるせえよ。冒険者になったばかりだから上下関係には疎いんだよ。殴りたけりゃ殴れよ。殴られたぐらいじゃ俺はお前を上には見ないけどな」

お願い殴らないで！口ではカツコつけたが痛いのはやっぱり嫌だ。こんな見え見えの挑発にも関わらず銀髪は神経を逆撫でされたように、眼は血走り犬歯を覗かせる。正直超怖い、銀髪が醸し出す暴力的な威圧感が恐怖心を煽り身を竦ませる。

この雰囲気を一言で表すならば一触即発だろう。俺に関係なければ随分と愉快的な見世物だと思うのだが、いざ自分の身に降りかかると笑いの一つも出てこない。もう嫌！お家帰りしたい！

そんな眼を背けたくなるようなピリピリとした緊張感の中、少年の嘔き出したような笑い声が場の空気を壊した。

「…いや失礼、何も可笑しかった訳ではないんだ。ベートにそこ迄のことを言える人間が珍しくてね」

金髪の少年は楽しそうに言う。いやいや全然楽しくないからね、何笑ってんのふざけんなよ俺と代われよ。眼で少年に文句を述べるがまるで少年は意に介さずにそのまま言葉を続ける。

「ベート、そこまでだ。彼は力は持たないが、君が思っている程弱くない。これ以上やると言うなら、僕も団長として見過ごす訳にはいかな

い」

「…………チツ！」

金髪の少年の言葉に銀髪の青年は苛立ちを隠さずに舌打ちをして俺から手を離す。青年から解放されて安堵感が満ちた。本当に怖かった、骨無しチキンとまで言わしめた俺からしたら正に地獄のような一時だった。

「…だけど、これでおしまいというのも面白くないね。」

収集しかけた空気の中、悪戯を思い付いた子供のような笑みを浮かべた少年の言葉に不安を駆り立てる。もう嫌な予感しかしない、今すぐにこの店を出ないと碌な目に遭わないぞ絶対に。

この場をさっさと立ち去ろうとしたが時すでに遅く、少年は遠慮なく、嬉々としてその誰もが耳を疑うふざけた提案を口にする。

「ここは冒険者同士、きちんとした決闘で決着をつけるのはどうだい？」

純粹な子供のような笑みを浮かべた少年の姿は、俺にはまるで悪魔のように見えた。

第6話

決闘。現代社会においては余り馴染みのある単語ではないが、歴史を振り返れば俺の世界でも行われている行為だ。日本ではもうカードゲームでぐらいしか使わない単語だろう。デュエル！俺のターンドロー！まあ友達いないからカードゲームなんてしたことないけど。だがこの金髪の少年が言っている決闘とは決してカードゲームをしようなんて話ではないだろう。この下らない銀髪と俺の諍いをきちんとしたルールを決めたうえで決着をつけようということだろう。

結論、勝てるわけないだろ。

ムリムリムリムリ、何が悲しくてこんな闘いしか能のないような脳筋と喧嘩なんかしなくちゃならないんだよ。

だってまずこの銀髪、人間じゃないじゃん。獣耳生えちやっつてんじゃない。絶対に闘いにならないって。

これはあれか、調子に乗んなよっていう金髪からの忠告か？金髪の顔を覗き込むと、含みを持たせた笑顔で俺の眼を見る。ただ面白がっているだけにも、何やら考えがあるようにも見える。だがその眼には何処か少年のような純粹さが伺えるようにも思える。いやそんな期待されても闘わないけどね。

周りの客たちも最初は少年の言葉に困惑していたが、次第に理解し俺に少しずつ注目し始める。この雰囲気はマズイ、このままだと周りが勝手に俺と銀髪が決闘をすることで話を纏めかねない。そんなことをされたら間違いなく銀髪に殺されてしまう、異世界漂流二日目です。リタイアなんてシャレにならない、早く話を終わらせなければ。

「い、いや、俺はやらな「面白えじゃねえか!!？」」

慌てて決闘をしない旨を少年に言おうとしたが、銀髪が俺の台詞に被せるように言った。なにも面白くないですけど、何が面白いんだよ、イジメカツコワルイ！

「散々デカイ口叩いたんだ、まさか逃げ出したりしねえだろおなトマト野郎!!？まあ、勝負にはならねえだろうがな！」

闘争心を剥き出しにし俺を睨み付けながら銀髪が言う。コイツ俺

が初心者だつてこと忘れてないか？まさかどころか今すぐ逃げたいんですけど。

まだ間に合うはずだ、こんな闘い俺に何のメリットもない。この銀髪の言う通りどう考えても勝負なんて物にはなりはしないのだ、やるだけ無駄だ。もう一度決闘をお断りしようとしたところで、別のところから声上がる。

「ハハーなかなか面白いことになったじゃないか！この決闘受けなよ！受けたら今日の料金はなくていいよ！」

何故か女将さんがノリノリで言ってくる。何でみんな人の話を聞かないの？ぼっちの意見は無視するのがデフォルトなの？難聴系は隣人部の金髪だけで十分ですよ。

「決まりだね。じゃあレベルの差もあるし、決闘のルールは君が決めていいよ。構わないよねベート」

「ハッ！構わねえよ、どんなルールだろうと俺が雑魚相手に負けるなんざありえねえからな」

最悪だ、どんどん話が進んでいく。俺の意見なんかまるで気にしちゃいない。てか金髪、なんで勝手に決闘することにしてんの、何も決まってねえよ。俺何も返事してないんですけど！

だがもう何を言っても手遅れだ。周りは最早決闘ムード一色、ここで決闘しないなんて言ったところで誰も耳を貸さないだろう。少数意見は潰されるのが世の常だ。世界中で少数派、それどころか一人きりの俺には大多数の意思を覆すことなど出来はしないのだ。

大袈裟に溜息を吐き出し、金髪の睨みながら言う。

「……ルールは俺が決めていいんだな？」

俺があっさりを受け容れたのが意外だったのか、少年は一瞬驚きの表情を浮かべる。自分で追い込んでおいてなんだそのリアクションは。

「ンー、どうしてもレベルの差が大きいかからね、それぐらいのハンデがないと勝算なんてないよ。むしろハンデとしては少なすぎるぐらいさ。なんならまだ色々とハンデをつけようか？」

「いやいい。じゃあ俺の提示したルールが絶対つてことでもいいか？」

「あまりに酷いルールならその場で却下するが、君のルールを遵守しよう。ルール次第では君にも勝ち目があるだろう。それと決闘にはボクが立ち合う。問題ないかい？」

「大丈夫だ」

今の会話で理解する。少年は俺を試しているのだ。この圧倒的に不利な状況下で何ができるのかを、先程の大口を叩いた俺の器量を。冒険者というだけあって考え方がとても面倒だ。力を示せない人間が立ち向かうなどでも言いたいのだろうか。それとも何かしらの企みがあるのかもしれないが、ただ単純に迷惑極まりない。何処の熱血バトル漫画だ、平塚先生か。俺の隠された力や血統や才能よ、都合よく目覚めろ！

今漫画を引き合いには出したが当然そんな力は目覚める訳はない。俺は異世界から来ているかもしれないが、力も何も無い貧弱な人間だ。主人公補正なんてありはしない。当然この身一つで闘わなければならぬ。

俺が持っているカードは何があるかを考える。貧弱な肉体、圧倒的に不利な状況、勝ち目のない決闘、相手の驕り、レベルの差、戦闘経験、ルールの決定権…

「…なあ、ここら辺で何処か決闘に向いている場所はあるか？」

「あ、でしたらこのメインストリートを少し行っただころに舞台のある広場がありますよ」

俺の質問に何故かシルが答える。いつの間に戻って来たんだ、戻って来てたのならもつと早く助け船を出して欲しかったマジで。

見るとシルの表情はどこか浮かない、ベル・クラネルを止められなかったことが気掛かりなのだろうか。

見ると剣姫と剣姫を追いかけて外に出た女性も店内に戻って来ている。恐らく今の現状を把握できていないのだろう、彼らのファミリアの大人っぽい女性から話を伺っているようだ。

「よし、ならそこにしよう。ルールは単純だ。その舞台に入って、先に舞台から外に出た方の負けだ。何でもありの一騎打ち、力の勝負だ。相撲みたいな感じだな」

俺は今考え抜いた決闘のルールを皆に述べる。恐らく勝利できる可能性があるとしたらこのルールだけだ。

周りの話し声が耳に入る。ルールが想像以上に真つ向勝負のルールで驚いているのだろう。中にはスモウってなんだという声を聞こえる。この世界相撲ないのか、俺もよく知らないからどうでもいいが、少しカルチャーショックだ。

金髪の少年はこのルールを聞いた後、吟味するように思案を始める。やはり彼も俺に圧倒的に有利なルールや理不尽な勝負をイメージしていたのだろう。やがて顔を上げると再び笑みを浮かべて少年は喋り始める。

「ソー、いいのかい？正直このルールじゃ君に勝ち目はないと思うけれど」

「構わない。このルールでいいか？」

「どうだいベート？君はどう思う？」

少年は銀髪に話を振る。恐らくこのルールは勝手な推測だが銀髪の好きな決闘のはずだ、喜んで食いついてくるはずだ。様子を見るため銀髪に視線を向けると意外に銀髪は機嫌を損ねたような表情を浮かべていた。

「おい、トマト野郎。テメエ勝ち目がねえからって勝負を諦めたのかよ。逃げ腰のやつを潰すようなくだらねえ雑魚になるつもりはねえぞ俺は」

睨みを効かせ吐き捨てるように銀髪は言う。

対等過ぎる条件の決闘、それが銀髪の琴線に触れたようだ。先程までとは違う段違いの迫力を持つ、お前如きが対等に闘おうと考えること自体が烏澁がましいと言わんばかりの静かな怒りだ。

ルーキーなんかには舐められてさぞかし御立腹だろう。だが俺はこのルールを変えるつもりはない。銀髪のプライドなど踏み躪るように俺は銀髪に言う。

「諦めてなんかねえよ。むしろ珍しく勝つ気満々だぞ。むしろお前こそビビッてんじゃねーのか？」

「上等だ。せめて余興になる程度には抵抗してみろ。再起不能になっ

てから後悔するんじゃないぞ」

互いの視線が交差する。正直怖いので目を背けたいが、この銀髪は今俺に対等に扱われること自体に怒りを覚えている。ならこうして挑発しておけば勝手に冷静さを失ってくれるかもしれない。べ、別に脚が竦んで動けない訳じゃないんだからね！

「ならルールは決まりだ。決闘は今から30分後にしよう。じゃあな」

「ちよつと待った」

酒場から出ようとしたとこれで金髪の少年から再度声をかけられる。

俺からした手遅れだとは思うがこれ以上目立つのは避けたいので今すぐ店から出たかった。億劫な態度を隠さずに顔だけを少年に向ける。

少年は相も変わらず笑顔を浮かべて俺に問いかける。

「君、名前は？」

「…比企谷八幡」

俺は名前だけ言って酒場から出る。去ろうとする背中にも視線を感じるほど目立ち過ぎちゃってもう限界、恥ずかしい恥ずかしい。

この世界に来てから碌な目に遭ってない、いや元の世界も似たような気もするが、1日の密度が濃すぎる。今なら学園都市のツンツン髪の気持ちを多少理解できる気がする、不幸だ。

足早にその酒場から離れようとしたところで後ろから女性から声をかけられる。どこか聞き覚えのある声だったがこの世界に俺に声をかけてくるような知り合いはいない。いや元の世界にも俺に声をかける知り合いなんてごく僅かしかいないんだけどね。

気にしないことにして声を無視して歩くが、何故か背後の声の主は何度も俺に声をかけてくる。無視だ無視、きつと俺のことじゃない。俺以外の誰かに話しかけているのだ、いやー勘違いを絶対にしない俺って凄いやね！

「聞いているのですか、比企谷さん」

ふと気付くと目の前にウエイトレス姿の少女が立っていた、恐らく先程の酒場の店員の一人だろう、全然覚えてねえけど。少女の姿はまるで童話に出てくる妖精を思い出させる美しさと麗しさを持っている。いつの間にかやら追い抜かされていたようだ。

「…俺に声をかけてたの？全然気づかなかったわ」

「周りにあなたしかいないのに誰に話しかけるといいうのですか」

案に無視をしていたことを咎めているのだろう、言葉遣いもシルと比べるとだいぶ固い気もする。どうやらあの酒場にもまともな神経を持った人間はいたようだ。

「…俺に何か用か？出来るなら酒場の誰かに見られたら気不味いから早くこの場を離れたいんだけど」

「…では、こちらへ来て下さい」

人目のない路地裏に少女に案内される。女の子と路地裏で二人きりって何処となく卑猥なことをされる気がしてドキドキしてしまう。もしくはカツアゲされる直前みたいでこっちでもドキドキしちゃう！

何故だろう、前者は絶対に起こり得ないと断言できるのに、後者はありありと想像出来てしまう。さつきも言ったけど八幡お金持っていないよ！

「私の名はリユー・リオン。【豊饒の女主人】で働いています」

「…比企谷八幡だ」

まさか自己紹介から始まるとは思わず少し拍子抜けしてしまう。ただこちらからすると特に名乗ることもないので名前だけ伝える簡素な自己紹介をすると、リユーと名乗った少女はコクリと一度頷いた。そういえばさつき既に名前を呼ばれたような気もする。この少女も酒場の店員なのであれば俺の名を聞いていたのかもしれない。

まだ出会って数秒だが凄く真面目な人間という印象を受ける、俺とは気が合わない気がするな。

「…あまり気を使って話すのは苦手なので、単刀直入に聞かせて貰います。本当に勝てると思っっているのですか？」

リユーと名乗った少女はその射抜くような視線を一度も逸らさずに俺に問いかける。その真つ直ぐ過ぎる思いが込められた眼にどうしても苦手意識を抱いてしまう。罵倒してこない分、雪ノ下よりも正しくも感じる。

「あなたはレベルの違いを甘く見ている。初心者が間違っても勝てる相手ではない。今直ぐにでも戦いを取りやめるべきだ」

少女の口から語られたのは忠告、もしくは警告と言った方がいいだろうか。初対面にも関わらず随分と厳しいことを言う人だ。あまり人付き合いとか得意じゃなさそうだな、やだ親近感湧いてくる！

「やめる気はねえよ。基本働きたくない俺が珍しくやる気なんだ、こりや明日は天気が荒れるな」

「茶化すのはやめて下さい、私は真面目に話をしています。そしてやる気も関係ありません、気合や感情でレベルの差を覆せるのであれば苦労はない」

やばい冗談が通じないタイプだこの人。いや俺の冗談なんて基本引き笑いか無視かのどちらかしかされたことないんですけどね。

それにしてもこの世界の住人ってのはみんなこんなに冒険者のことに詳しいのか？まるで持論を語られているようだ。ただ話を聞いている限りレベルが違うというのは絶対的な差が生まれるようだ。それこそ初心者が敵うはずがない程の。

「確かにアンタの言う通り勝つのは難しいのかもな。正直面倒だし行きたくもねえけど、まあ勝算がない訳じゃないし、やるだけやってみるさ」

「…そうですか。ではもう止めません。ですがもう一つ聞いてもいいでしょうか」

リユーは俺が戦わないのを諦めたようで、別の話題を問いかける。

いや俺これ以上会話したくないんですけど、早くお家帰りたいんですけど。あ、この世界俺ん家なかったや！てへっ！うわー、…自分の部屋がこんなに恋しくなるなんて思わなかった。ベッドで寝たい！本が読みたい！小町に会いたい！ホームシックってこんな感じか？えっちよつと違う？

「なんだよ、もうそろそろ時間だから短い質問にしてくれよ」

「…この鬪いをあなたが受ける理由はなんですか？」

彼女の真剣な眼つきが更に鋭さを増す。問われたはいいが咄嗟に理由が全く出てこない。俺が鬪う理由はなんだ？

間違いなく成り行きだろう。お金がない、タイミングが悪いといった不幸は続いたが、だが逃げる事が不可だったかといえそうではない。逃げ出そうと思えば幾らでも逃げ出せたはずなのだ。

では逃げ出さなかったのは何故か。俺自身に決闘に拘りは無い、むしろ鬪わなくて済むならそれが一番だ。怪我とかしたくないし。

なのに俺は鬪うことを選んだ。リスクを十二分に孕み、リターンなんて皆無の意味のない鬪いだ。そんな選択肢を選ぶ奴の気が知れない。

ふと誰かに言われた言葉を思い出す。俺は誰かを助ける為なら自分が傷つくのを厭わないのようなことだったはずだ。今回も俺が傷付こうとしているのであれば、それは一体誰の為だ？俺は誰の為に鬪おうとしている？

この世界で出会った少女が俺に言った言葉を思い出す。

彼女は体裁も自尊心もかなぐり捨てて、頭を床に擦り付けて俺に依頼したのだ。なら俺が中途半端にする訳にはいかないよな。

「別に大した理由はないさ。強いて言うなら成り行きだよ、成り行き」俺が思い浮かんだ鬪う理由。カッコつけてるつもりはないが、これは人に言うべきことではない。

きつと雪ノ下や由比ヶ浜がこの行動を見れば俺を咎めるのだろう。だがまだ俺はこんなやり方しか出来ないのだ、一人で何もかもを抱え込むことしか出来ない。

「…成る程。あなたはそういう人間なのですな」

気づくと少女の真っ直ぐな眼に何処か影があるように見える。まるで俺を通して違うことを見ているような、もしくは俺と何かを重ね合わせているような視線。

「どうやら私は比企谷さんという人間を誤解していたようだ。陰湿で、傲慢で、独善的な人間と評価していました」

リユーは真っ直ぐな視線を逸らさずに吐露する。なんでいきなり罵倒されてるの？コイツ初対面なのに全く遠慮ねえな。

一瞬雪ノ下と重ねてしまったが、雪ノ下と比べるとリユーには悪意がないように思える。いや悪意がなくても人を罵倒していいことにはならないけどね。

子供の頃によくあった、わざとじゃないから許せよと言いながら殴ってくるクラスメートを思い出した。わざとじゃなくても殴られたら痛いんだけど、拳げ句の果てに、うーわ比企谷菌に触っちゃったよ汚えってどういうことだよ。だったら最初から触んなよ。

「…よく見てるな。間違ってるねえと思うぞ。つか自分の他人に対する評価なんて偏見と主観的なことだからな。お前がそう思ったならそれが正解なんじゃねーの」

自分が本当はどういった人間か、何を考えているかなんて他人には関係ないのだ。人は自分の主観を信じ、自分の見ている世界だけが全てと思いつまむ。

だから努力して夢を掴んだ人間には天才と評し、自分とは違うのだと勝手に差別する。

本人の主張なんて意味を持たない、見る人が違えばその景色は別の景色なのだ。だから他人が俺をどう認識しているかはどうでもいい。誤解は解けない、何故ならもう解は出ているから。

「そうですね。比企谷さんの言う通りだと思いますよ。ですが人の話は最後まで聞くべきですね」

「はっ。」
「私は誤解していたと言ったはずですよ。私はあなたのことをこう思います」

リユーは俺に一步近づく。所作の一つ一つが麗しさを持ち、見る者全てを虜にしてしまえるような魅力を感じる。

「不器用で、愚直で、卑屈で、そして何より純粋な優しさを持っている。あなたは自分をどう思っているのかはわかりませんが、とても美德だと思えますよ」

一歩ずつ近づいてくるリユーに思わずどギまぎしてしまふ。心臓

の音がやけに煩い、褒められるのには慣れていないせいであらう。先程のリューの言葉には違和感しか覚えなかった。だが、それでも彼女のその真剣な目が彼女が本心を語っていることを証明しているかのようだ。そんな彼女の視線が気恥ずかしく、彼女から目を背ける。

「…まだ会ったばかりで名前ぐらいしか知らないのに人を語るなんておかしいでしょ。それに買い被りすぎだ、俺はそんな大層な人間じゃない」

「ですが先程比企谷さんは私が思ったことが正解だと仰いましたよ。それに私はあなたを大層な人間だとは思っていません、特にその自分を卑下する癖はどうにかしたほうがいい」

至って真剣な表情でリューは言う。言質を取って俺の否定を潰したうえ、俺を器用に罵倒して、更に説教までするフルコースだ。リューさん大分キツイ性格してますね、しかも悪気が一切なさそうなのがタチが悪い。

「では私はそろそろ戻ります。怪我をしないようお気をつけて」

そう言うどリューは踵を返す。思わずその後ろ姿を眺めてしまう。

あの酒場を出てからどれぐらいの時間が経っているのだろうか、時間感覚もあやふやになってしまっている。

大仰に溜息を吐き出し、俺もその場から広場に向かって歩き出す。

ふと彼女の声を最初に聞いた時に聞き覚えのある声だと感じたことを思い出した。その時は何も思わなかったが、今なら彼女の声が誰に似ているのかはつきりとわかる。

そうか、リュー・リオン。彼女の声は、

雪ノ下雪乃に似ているのだ。

第7話

今回の決闘に関してだが、まず大前提として俺が真剣に付き合う必要はない。いざとなれば逃げたつていいし、やる気だつて有りはしない。

あの銀髪や金髪がどう思っているかは知らないが、俺が真面目にこんな茶番に付き合う必要はないのだ。周りの人間だつて勝ち負けなんぞに興味はない。さぞかし彼らは有名なファミリアなのだろう、そのメンバーが決闘をする、そのこと自体に興味があるのだ。

そもそもこの決闘自体無理がある、俺は初心者だ。そんな俺が冒険者のトップカーストの人間と決闘なんてどう間違つても起こり得てはいけない。もしかすればこの決闘自体が彼らの評判を貶める可能性だつてあるだろう。そもそも決闘をするメリットが彼らにはないのだ。

それにも関わらず、彼らのリーダーである少年自身が決闘を申し込んできた。あの金髪が何を企んでこんな場を設けたのかはわからないが、俺はこんなショーを決して盛り上げようなんて思わない。いつものように斜め下に、空気を壊すように、茶番には茶番を持つてして、この下らない決闘を終わらせよう。

シルの言つていた道をのんびりと歩いてみると、道の奥に人集りが見えてくる。恐らくここが広場で、ここにいるのは酒場にいた人間と野次馬たちだろう、随分と暇な人達がいるもんで。

「おっせえぞ!!?」

突如怒声が轟く。どうやら俺よりも早くに銀髪は来ていたようで痺れを切らしているようだ。まあ大分遅刻しちやつたしな、そりや怒るか。

銀髪の立っている舞台に近づいたところで先程の酒場にいた金髪の少年が声を掛けてくる。

「やあ、ようやく来たね。随分と遅かつたじゃないか」

「道に迷つたんだよ、ここら辺の地理には疎いんでね」

当然口から出まかせだ。時間通りに来ようと思えば来ることは出来た。だが俺の作戦を実行するにはこの場に時間通り、もしくは時間より早く来る訳にはいかないのだ。

「ハッ！逃げ出したんならそれでもよかつたがな！今から逃げてもいいんだぜ！」

舞台の上から銀髪が歪んだ笑みを浮かべて言う。

その表情から俺が負ける訳がないという強者の余裕がありありと読み取れる。きつと銀髪にとってこの決闘は勝負にすら入らぬ見戯にも等しいのだろう。

だからこそ、俺の予想通り銀髪には油断と隙が生まれる。もう銀髪の思考は止まっている、何故ならこの戦いは銀髪の勝利が揺るぎないものだから。観客も銀髪本人もそれを疑うことはないだろう。当然の驕り、それが致命的な付け入る隙になる。

「じゃあそろそろ決闘を始めようか比企谷くん」

「安心しろよ。ブルっちまって遅刻しちまうお前の為に一瞬でケリつけてやるからよ!!?早く舞台上がって来やがれ!!?」

正に舞台は最高潮と言ったところだろう。銀髪の雄叫びのような挑発にドツと歓声が湧き上がる。もはやこれは喜劇だ、決闘なんて大仰なものでは決してない。観客が観たいのは俺の勝利でも敗北でもない。ダンジョン以外ではお目にかかれない銀髪の勇姿だ。つまりはこの勝負の内容にも結果にも誰も興味がないのだ。

だが俺はそんな期待に込めるつもりは一切なければ、あの銀髪の勇姿なんて微塵も見せる気はない。この舞台は俺の独壇場だ。悪いが今回の主役は譲って貰う、もちろん俺がなれるのはヒーローなんてカッコいいもんじゃない。

泥にまみれた格好悪いやられ役、俺の配役なんてそれで充分過ぎる。

俺は舞台の目の前で歩みを止める。当然銀髪は怪訝な顔を浮かべるが俺の知ったことではない。痺れを切らして銀髪が苛立ちを隠さずに俺に言う。

「どうしたよ。やっぱり怖くなっちゃったか？」

はい、めっちゃ怖いです。帰っていいですか？

「…まずルールの確認だ。ルールはさっき俺の提示した通り、この舞台上がって、先に舞台から出たほうの負けでいいんだな？」

「チツ、何でも構わねーよ、とつとと始めようぜ。むしろ雑魚を相手するのにふさわしいハンデくれてやろーか？」

余裕を露わにして笑い声を上げて声高々に言う。ハンデなんかに興味はないが言質は取れた。余裕綽々なところ悪いがもう茶番はおしまいだ。幕引きといくとしよう。

「ハンデなんかいらねーよ。だがこの舞台上がるつもりはない」「は？」

銀髪が何を言ってるやがると言わんばかりの表情を浮かべる。銀髪だけではない、この場にいる観客全員が俺の発言を理解出来ずにいるだろう。

だが別に俺は納得も理解も求めちゃいない。他人のことを知る事なんて出来ない、出来るのは知ったつもりになることだけだ。だから俺のことも知る事なんて出来ないし、出来なくていい。

「ルールはこの舞台上がって、先に降りた相手の負け。勝負としてここまで単純なルールはない。イカサマもインチキも裏をかくことも難しいフェアプレー精神に溢れるルールだ。もつともルール通りに闘いが行われるんだっただけだな」

今から俺が語る策は誰が聞いても屁理屈だ。

言うなれば子供がジャンケンをした際に指で銃の形を作り、これは無敵だから俺の勝ちと言うような。或いは鬼ごっこの際にタッチをされたのにも関わらず、バリア中だから効かないと言うようなただの戯言だ。

普通ならこんな発想はしないのだろう。こんな事を言えば皆からバッシングを受けるのは眼に見えている。例えルール上は俺の勝ちだと宣ったとしても誰も認めはしない、いつものように爪弾きにされるだけだろう。

そう、いつもと変わりはないのだ。例え異世界に来ようが、冒険者になろうが俺は変わらない。そんなことでは人は変わらない、変わってはいけない。

だから変わらず俺は最低と罵られる道を平然と歩くことにしよう。チクリと胸を刺すような痛みを感じた気がしたが、きつと気のせいだろう。

「なら、俺がこのまま舞台上がらなかつたら、お前は誰と闘うんだ？」

自分の発言で空気が凍りつく体験は何度目であつても気持ちのいいものではないが、俺にとつてこんなのは日常茶飯事だ。空気を凍てつかせることに関してはプロフェッショナルと言つてもいい、報酬を要求するレベルまである。やだ、俺働いちやつてる☒

「……は？」

呆気にとられた銀髪が一言溢す。

周囲にも困惑が拡がり先程迄とは違うざわつきが広場を包む。

「何言つてんだお前！とつとと闘えよ!!？」

一人の観客が野次を飛ばすと周りも同調し、一気に広場はけたたましいブーイングが拡がっていく。侮蔑に嘲笑、そして怒気を孕んだ視線が俺に集まる。

彼らの言い分ももつともだ。横紙破りにも程がある、これのどこが決闘だと言うのか。例え俺が提示したルールを則っていたとしても大衆は認めはしない。

随分と人気者になつてしまったものだ、注目的になるなんて柄じゃなくて背中がむず痒くなる。

「……どういふつもりだ、トマト野郎オ……!!？」

犬歯を剥き出しにし、睨みを効かせて銀髪が言う。

「どういふつもりも何も、言つた通りだよ。お前は舞台から降りたら負け、俺は舞台上がらないから負けない、ルールに則つただけさ」さもあつげらかんと、そして自分は間違つてないということわざと

らしくアピールしながら言う。

きつと周りからは俺の姿は勇敢とはかけ離れた臆病者に見えることだろう、ルールに身を隠した狡猾な卑怯者。

そんな人間が銀髪の手相をすることは誰一人望んではいけない。望まれたのは、弱くても、愚かでも、負けるのがわかってても勇敢に立ち向かう人間。もしくは勇敢に立ち向かわなくとも、このショーを盛り上げられる道化だろう。

そんなのは俺の柄じゃない。らしくないことはしないほうが自分の為なのだ。だから俺はいつも通りにやれることをやるだけだ。

「ふざっけんじゃねえぞ!!?トマト野郎オ!!?」

破裂したかのような怒号が聞こえると同時に、俺の目に広がる世界が歪み回り始める。

何度地面を回転したかもわからない程地面を転がり回り、全身の痛みと抉られたかのように錯覚する程の頬の痛みに、ようやく自分が銀髪に殴られたということを理解する。

「が、あああああ…っ!」

声にならない呻き声が喉から漏れ出る。

かつての事故の記憶が思わず蘇るが、気を失うことの出来たあの時の方がまだマシだ。

ヘスティアの子になった俺の身体は多少だが強化されている。その弊害で銀髪の途轍もない拳を受けても気を失うことすら出来ないでいる。なんだよコレ、強くなったほうが辛いなんて聞いてねえぞ。

口の中を広がる鉄の匂いと味、全身の焼き切れるような痛みが吐気を込み上がらせる。手にも足にも力が入らず、這い蹲ることしか出来ない俺に、銀髪が怒りを露わにさせ歩み寄る。

ふと頭にあることがよぎる。いやむしろこの世界に来た時から、頭の中ではずっと考えていた。ずっと考えていて、考えないようにして

いた。

だが全身を駆け巡る痛みが、そして目の前の圧倒的な力に対する恐怖心が、避けようとしていた現実を否が応でも直視させる。

一歩ずつ、ゆっくり銀髪が歩を進める。足音が聞こえる度、心臓の音が周りにも聞こえるのではないかと思う程大きく跳ね上がる。

「そこまでだ」

その声にブラックアウトしてしまいそうだった意識が呼び戻される。

顔を上げると俺と銀髪の間を割って入るように金髪の少年が立っている。

「……どけよ」

「ベート、勝負はもう着いた。これ以上やるのは団長として認める訳にはいかない。拳を納めるんだ」

「……ちっ」

律するように金髪は言う。

銀髪は到底納得などしている様子はないが、それでも金髪の言葉に従い踵を返す。

「……終わった…のか」

銀髪が背を向けるのを見届けると同時に思わずそう呟く。

言葉にした途端、緊張の糸が切れるように全身を虚脱感が襲い、全身の力が完全に抜け、地面に倒れ伏す。

助かったという安堵感からか、恐怖から解放されたからなのか、或いは痛みのせいなのかはわからない。

だが今度こそ俺は、眠るように意識を失った。